川西町埋蔵文化財調査報告書第１集

K－55/

千松寺遺跡

発掘調査報告書

1980

川西町教育委員会

序

本報告書は，東北農政局白川農業水利改良事業として，小松基幹農業用水路の施工にともない，緊急発堀調査を川西町教育委員会が調査主体となり昭和54年8月25日より11月30日まで実施した成果をまとめたものであります。

調査により，下小松地内は平安期の集落跡としてとらえられていたが川西最古の先土器時代を初め，縄文早期，同前期，平安期，鎌倉期，江戸期それに近代期と古来より居住された複合遺跡として判明したことは川西町はおろか置賜一帯の古代史の解明に多大な指針を得ると共に埋蔵文化財に対する理解に，大きく貢献出来ることゝなり，本調査の成果が今後の研究の一助になれば，真に喜びとするところであります。

本事業の推進にあたって参加協力下された各位はもとより多大の御教示，御援助を賜った県文化課・国営白川工事事務所の方々に対し深甚なる謝意を表する次第です。

昭和55年3月

川西町教育委員会
教育長　近野和雄

例　　言

Ⅰ　本報告書は川西町教育委員会が，国営白川農業水利事業に伴う緊急発掘調査として，実施した発掘調査報告書である。

Ⅱ　発掘調査は川西町教育委員会が，東北農政局並に関係諸機関と協議のうえ，昭和54年6月17日～6月25日と同年8月28日～11月30日の二回に亘って実施したものである。

Ⅲ　調査体制は次の様である。

調査主任	手塚　孝
調査副主任	藤田宥宣
協力員	蔵田順治・五十嵐不二雄・小関寿郎・竹田又右衛門・小原久助
	井上昌平・竹田源右衛門・石田四郎衛門・㊚小形仁兵衛
特別調査員	柏倉亮吉・加藤　稔・橋爪　健・佐藤鎮雄
調査補助員	鈴木芳徳・手塚武雄・手塚孝信
調査協力	山形県教育庁文化課・置賜考古学会・まんぎり会・地元地権者

Ⅳ　報告書内の遺構挿図記号はＳＴ－竪穴住居跡，ＳＭ－塚，ＳＫ－土壙，Ｐ－掘立建物跡と推測される柱穴跡もしくは柱穴跡，ＳＨ－墓壙，ＳＤ－溝状遺構，ＥＶ－火葬跡，炉跡，焼土遺構，ＳＰ－不明ピット，ＳＸ－不明遺構として，各記号順（ＳＴ１～ＳＴ２，ＳＤ１～ＳＤ５例）に一連番号とした。

Ⅴ　本書の作成は，第Ⅰ・第Ⅱを藤田宥宣，第Ⅲ～第Ⅵを手塚　孝，写真図版・編集を両名が当り，図版トレース・土器実測・拓影図・石器トレースは手塚，石器の実測を藤田がそれぞれ担当した。

1980年3月

本　文　目　次

Ⅰ　遺跡の概要 …… 1
Ⅱ　調査の経過 …… 2
Ⅲ　層　　序 …… 4
Ⅳ　遺構の概要 …… 5
　　ＳＴ１ …… 5
　　ＳＴ２ …… 8
　　塚　　群 …… 10
　　柱 穴 群 …… 16
　　溝状遺構 …… 16
　　近世の遺構 …… 19
Ⅴ　遺物の概要 …… 19
　　石　　器 …… 19
　　土　　器 …… 25
　　その他の遺物 …… 27
Ⅵ　総　　括 …… 28

挿　図　目　次

第１図　千松寺遺跡周辺の地形図 …… 1
第２図　千松寺遺跡グリット配図 …… 3
第３図　千松寺遺跡遺構配図 …… 6
第４図　千松寺遺跡ＳＴ１平面図 …… 7
第５図　千松寺遺跡ＳＴ２平面図 …… 8
第６図　千松寺遺跡Ａ拡張区遺構平面図 …… 9
第７図　千松寺遺跡ＳＭ２～４測量図 …… 11～12
第８図　千松寺遺跡ＳＭ２平面図 …… 13
第９図　千松寺遺跡ＳＭ３平面図 …… 14
第10図　千松寺遺跡ＢＣ拡張区遺構平面図 …… 17～18

第 11 図　千松寺遺跡出土石器実測図 (1) …… 20
第 12 図　千松寺遺跡出土石器実測図 (2) …… 22
第 13 図　千松寺遺跡出土石器実測図 (3) …… 24
第 14 図　千松寺遺跡出土土器実測拓影図 …… 26
第 15 図　千松寺遺跡石鏃製作順位図 …… 31
付表 1　千松寺遺跡ＳＭ３層序一覧表 …… 13
付表 2　千松寺遺跡ＳＭ２層序一覧表 …… 13
付表 3　石器製作工程概念表 …… 31

図　版　目　次

図版 1　a 遺跡近景　b 発掘風景
図版 2　a ２号塚全景　b ３号塚全景
図版 3　a ２号塚完掘状況　b ３号塚完掘状況
図版 4　a 石器工房跡全景ＳＴ１　b 住居跡全景ＳＴ２
図版 5　出土石器
図版 6　出土石器
図版 7　出土石器
図版 8　出土石器
図版 9　a 出土土器　b 石核　c チップ
図版 10　出土中世陶器
図版 11　a 五輪塔　b 古銭

第 1 図　千松寺遺跡周辺の地形図

Ⅰ　遺跡の概要

本遺跡は山形県東置賜郡川西町下小松稲荷堂 215 (他) に存し，標高 270 ｍの眺山丘陵より張り出す舌状地の末端部に位置する。遺跡の直下には犬川の浸食作用による河岸段丘が発達し，その第 1 河岸段丘と微高丘陵先端の複合したゆるやかな標高 210 ｍに本遺跡はある。遺跡の南東２㎞には国鉄米坂線羽前小松駅があり，米坂線が米沢盆地の西側を眺山丘陵に沿って南北に通っている。

遺跡の南方約 50 ｍには安産信仰に名高い大宮神社，東方 300 ｍには真言宗の寺院千松寺さらに仁王様と批較的神社仏閣の集中する地帯でもある。この周辺には地形条件に恵まれ，遺跡が数多く存在しており，眺山一帯を中核とする中世墳墓群が数百基を数える所であり，

薬師沢墳墓群をはじめ５ヶ所の墳墓群が集結する。この千松寺一帯は正式な発掘調査は実施されなかったが，昭和25年頃安部三郎氏が本遺跡南方約100ｍの場所から鎌倉時代と推定できる甕を出土したことにより，遺跡として認められるようになった①。また，西方約150ｍの県立置賜農業高等学校千松寺農場からは昭和20年以降開墾されるのにしたがい多量の石鏃等が出土し，調査に当った五十嵐不二雄氏らの調査によって多くの石器類が採集され，縄文遺跡として位置ずけられていた②。一方，農場の西100ｍには県指定の尼ヶ沢土壇，本遺跡の北東約200ｍには土壇状塚群が有し，これら塚群の一部より鋳鉄製の経筒が出土している③。同方向約１㎞には佐野遺跡④，約２㎞には道伝遺跡が分布する。

本遺跡は昭和35年の山形県教育委員会が実施した遺跡分布調査によると尼ヶ沢遺跡，千松寺遺跡（ 1327 号， 1332 号）として登録されている⑤。また同所を昭和51年11月に山形県が実施した埋蔵文化財包蔵地調査（調査員　橋爪　健氏，亀田昊明氏）により，尼ヶ沢遺跡は石鏃・須恵器が出土された遺跡で，遺跡面積は 4，000 ㎡，千松寺遺跡は７～９世紀の遺物が伴出する歴史時代の遺跡であると確認し，遺跡面積 4，000㎡と登録されている。この遺跡一帯の平坦部は残念ながら水田と化し，大部分は破壊され現在に至っている。

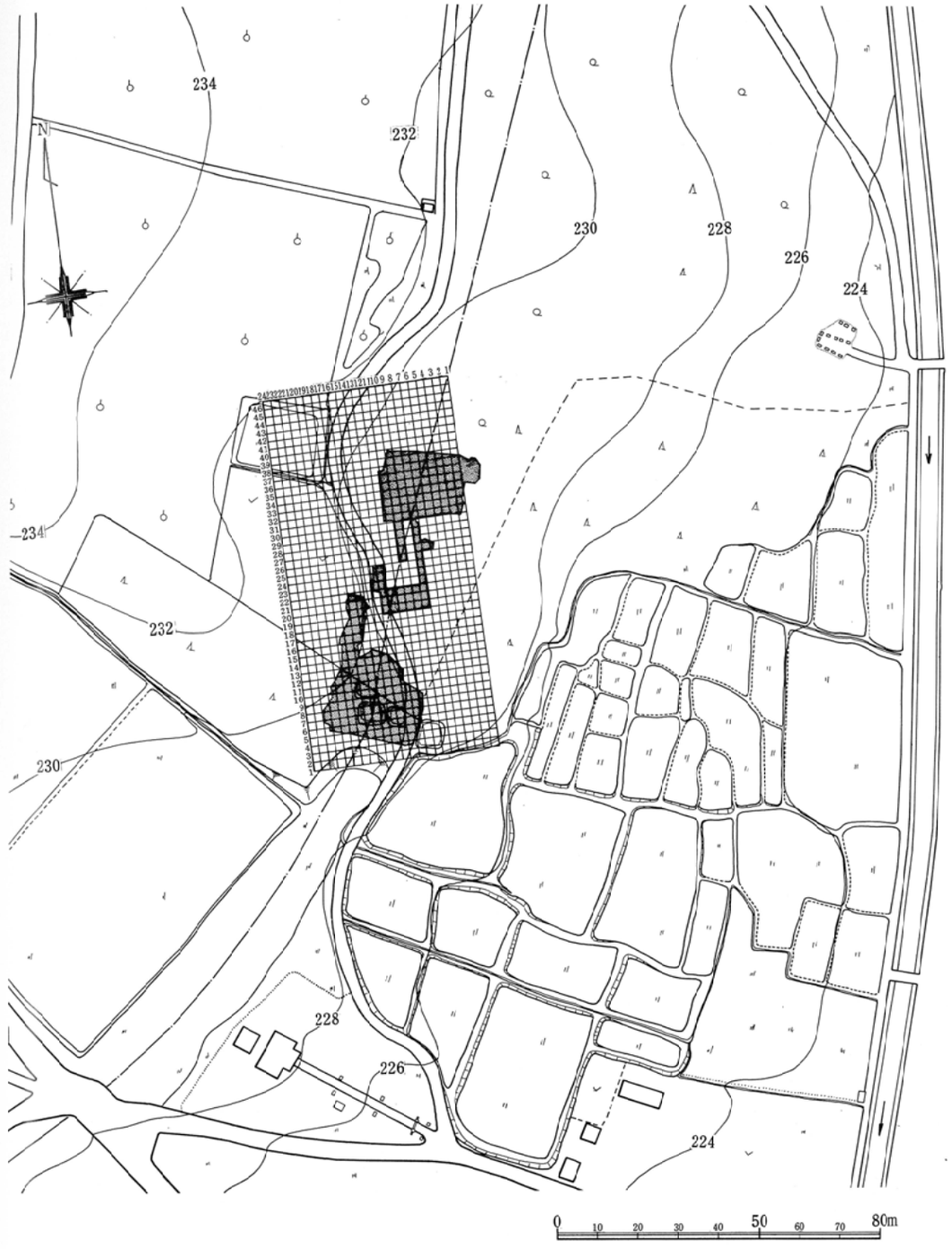
国営白川農業水利事業計画により本遺跡内を小松左岸幹線農業用水路事業が施工されることになった。

昭和48年に町教育委員会が調査した結果，昭和10年に鋳鉄製品の円筒形経筒を出土した土壇状塚群地域に施工されることを確認し，国営白川工事事務所と協議して，土壇状塚群の西側を通すことにした。しかし，変更された路線個所は樹林地帯であったため，試掘調査まではいたらなかったものである。

Ⅱ　調査の経過

千松寺遺跡近くを農業用水路が施工されると聞き，現地視察を行なった際に国営白川農業用水路が施工される路線上に伐採された樹林の中から数基の土壇状塚群を検出することができた。町教育委員会では再度調査を行った結果，７基の塚群を検出し，石鏃，須恵器片，陶器片，不明遺溝等を検出することができた。そこで，山形県教育庁文化課，国営白川工事事務所との協議により緊急発掘調査として昭和54年８月25日より同年10月25日まで調査を行うこととなった。

調査の開始として，発掘調査地外の用水路施工に通ずる工事用道路布設の必要が生じ，当該箇所の調査を６月末日まで調査を完了させることとして調査に入った。したがって，急遽，道伝遺跡調査日程を調整し，道伝遺跡と千松寺遺跡の調査を平行して進めることにした。調査方法は磁北を基準線として２ｍ×２ｍ単位の方眼を設定した。



第２図　千松寺遺跡グリット配図

調査は工事用道路部分調査（以下第１期調査という）６月12日～６月22日までと，水路部分本調査（以下第２期調査という）８月25日～11月30日までの二期に分け，調査することにした。

第１期調査　６月12日～６月22日　G（16～23－5～22）

調査面積は６ｍ×20ｍの約120㎡で，重機にて表土剝離をおこない，面整理，精査，実測の順で調査を実施した。第１期調査にて検出した遺構は石器工房跡１棟，５号塚周溝の西側，土壙数基が検出され，特に石器工房跡は他に類例のない遺構として貴重な資料を得ることができた。

第２期調査　８月25日～11月30日

第２期調査は道伝遺跡の緊急発掘調査が終了時より作業が開始された。調査地区内の草木を除去することより始まり，塚群G（11～20－3～18）を最初に調査するすることにしまず塚群の1／20の平面実測図作成をおこない，塚の構築状況を把握することを前提として版築ごと一層づつ掘り下げていった。

一方他のG（1～15－19～38）は，塚の調査と平行して表土の剝離を重機でおこない。表土の浅い部分においては手堀りも平行した。しかし，調査地区内は以前より杉の植林がおこなわれ立木が茂る樹林地帯であったことから，切り株が数多く見られ，根が地山より深く入り，除去するのは膨大な労力を必要とされた。また，稲作の刈り入れ時期と重り事実上調査がおくれ日程を変更し11月30日まで調査を行った。

調査は予想以上の困難を期したが，例年になく降雪が遅れたのが唯一の好事である。第２期調査にて検出した遺構は縄文早期住居跡１棟をはじめ，町内最古となる先土器時代の石器４点や中世期に位置する遺構等が検出している。

Ⅲ　層　　序

本遺跡の地形をみると微高丘陵と河岸段丘が複合した部分に存し，調査区全域の層序は調査箇所によって異なった状況を示す。たとえばＡ拡張付近は丘陵先端部に位置し，第Ⅰ層暗黄茶褐色微砂土・第Ⅱ層暗黄褐色シルト・第Ⅲ層黄褐色粘質土・第Ⅳ層明黄褐色粘質土に対し，Ｂ拡張付近はやや下った底位面に位置し，第Ⅰ層暗褐色微砂質土があり，Ⅱ層以下はＡ拡張区と同様である。Ｃ拡張区付近になるとＡ拡張区付近の丘陵とＣ拡張区の北側に張り出す丘陵との中間位置の沢状底位に有し，第Ⅰ層と第Ⅱ層に窩植した黒色土が入り込んでおり，第Ⅲ層以下はＡ拡張・Ｂ拡張区に順ずる。

従って遺構確認面はＡ拡張区は第Ⅱ層，第Ⅲ層面，Ｂ拡張区は第Ⅲ層面，Ｃ区は第Ⅱ層第Ⅲ層面となっている。

Ⅳ　遺構の概要

今回の発掘調査で確認された遺構は縄文早期中葉期に位置する石器製作工房跡１棟を初め，計240基が確認・検出されている。

遺構は，調査範囲を設定した1,750㎡内ほとんどに分布するが，中でも10～20－4～17（Ａ拡張区），9～12－20～25（Ｂ拡張区），1～11－27～38（Ｃ拡張区）の三ケ所に集中している［以下Ａ～Ｃ拡張区と呼ぶ］

Ａ～Ｃ拡張区の遺構数は縄文早期石器工房跡，竪穴住居，鎌倉期塚等を含む92基の重要な遺構が発見され，次にＢ拡張区では平安初期の建物跡など68基，鎌倉初期の遺構が存在するＣ拡張区では81基の遺構が検出されている。これらの遺構を年代順に検討すると次の様になる。

a．縄文早期－石器工房跡１棟，同竪穴住居跡１棟，同土壙１基。
b．平安初期－掘立建物柱穴跡48基，同溝状遺構７基。
c．平安末期～鎌倉期－掘立建物柱穴跡57基，同溝状遺構３基。
d．鎌倉期－火葬墳墓１基，同方形土壇状供養塚１基，同墓壙墳墓１基，同不明２基。
e．明治初期－火葬墳跡３基，同墓壙５基。
f．時期不明－ピット跡36基，同土壙15基，同大形土壙１基，同溝状遺構２基，焼土遺構２基，その他１基。

以下簡単に主な遺構について説明を加える。

◦ＳＴ１（石器工房跡）［第３図・第４図・第６図・第４ａ図版］

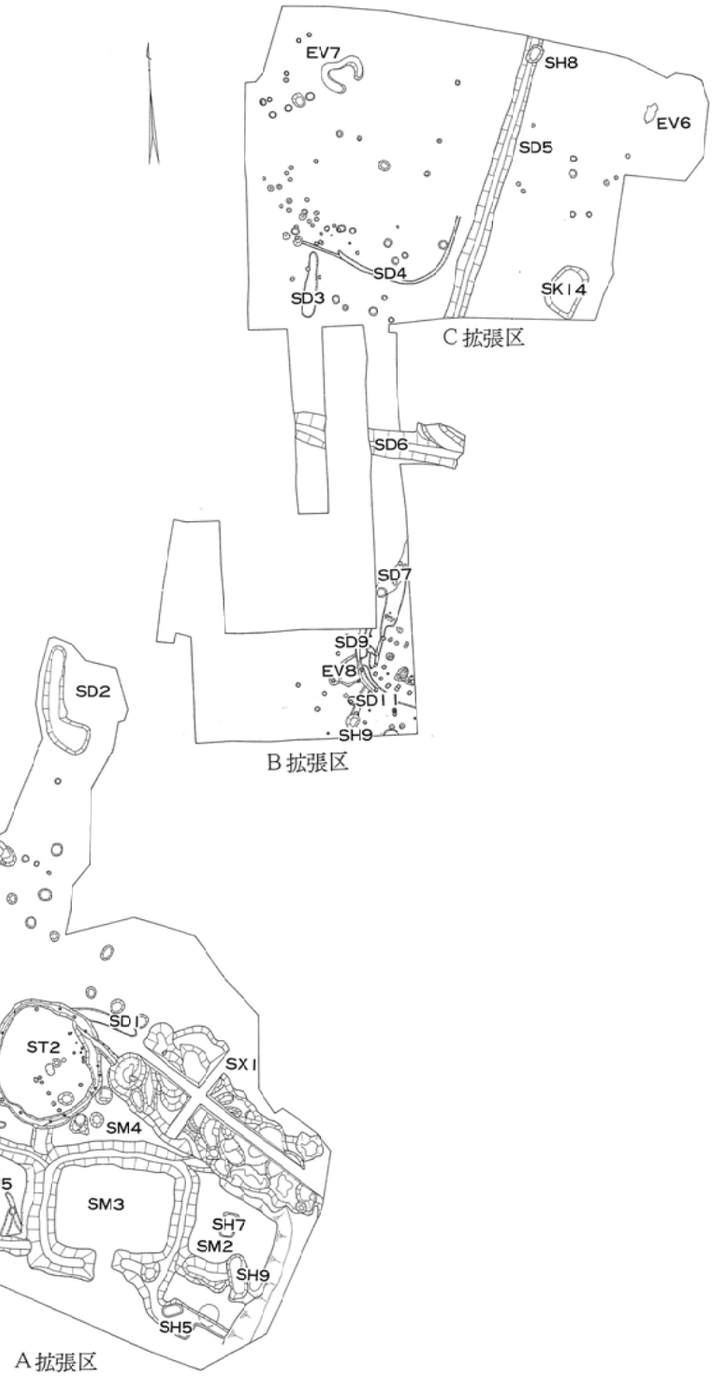
不製な円形プランを呈す竪穴住居跡で，長径3.2ｍ，短径2.7ｍをなす。北壁と西壁部にはなだらかなテラス状の広面を有するのが特徴である。

壁面はゆるやかに立ち上り，壁下で８㎝～12㎝，中央部で20㎝と中心部が深く，レンズ状の床面を有している。

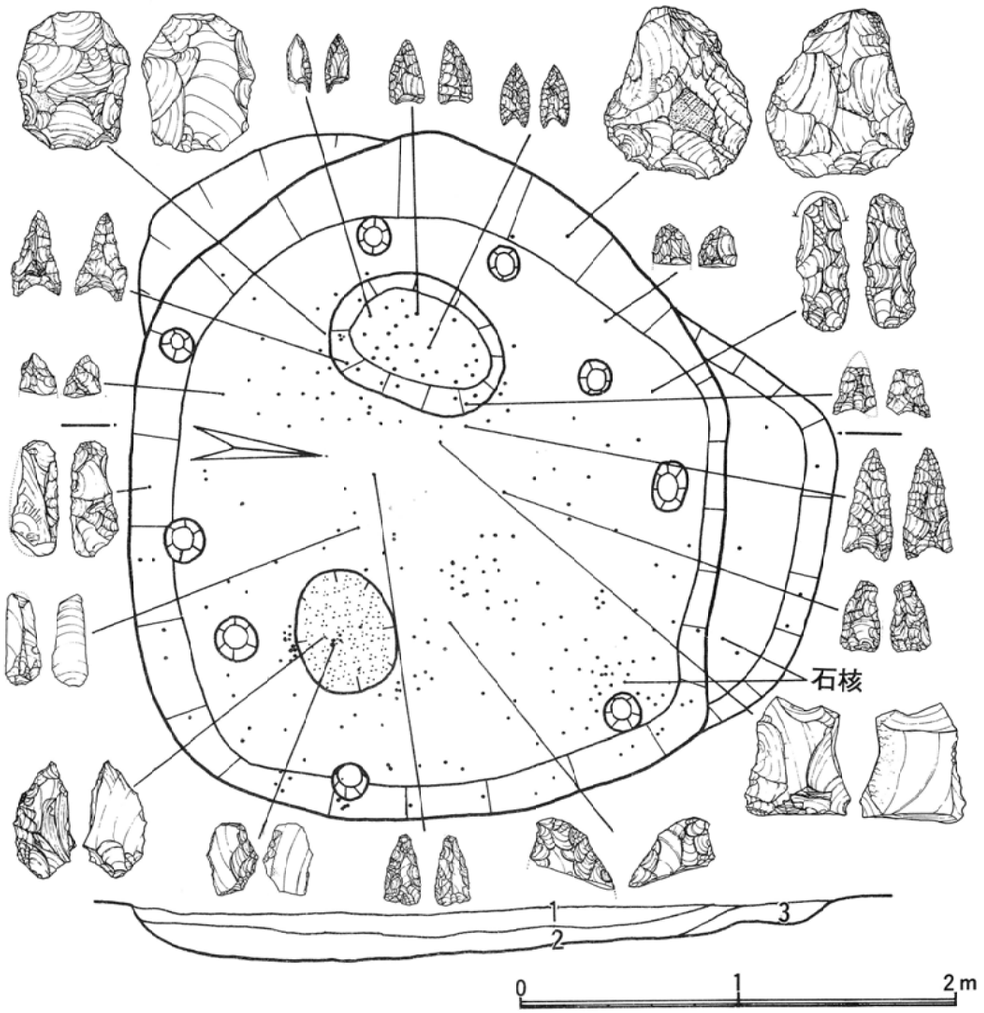
柱穴――径15㎝～20㎝，深さ10㎝～20㎝位で壁面よりに８基で構成する。

底面――比較的平坦で，西壁側に長径80㎝，短径60㎝，深さ39㎝の土壙（ＳＫ６）と東よりに長径55㎝，短径45㎝，深さ４㎝の浅い地床炉（ＥＶ３）が設置されている。

遺物――石鏃10点（うち完成品２点・未完成品３点・失敗品５点）・ヘラ状石器２点スクレーパー５点・石核３点・フレーク・チップ380点が床面直上より検出しており，特に土壙付近（Ａブロック），地床炉付近（Ｂブロック），石核付近（Ｃブロック）と３ケ所



第３図　千松寺遺跡遺構配図



第４図　千松寺遺跡　ＳＴＩ平面図

に亘っての石器の分布がみられた。

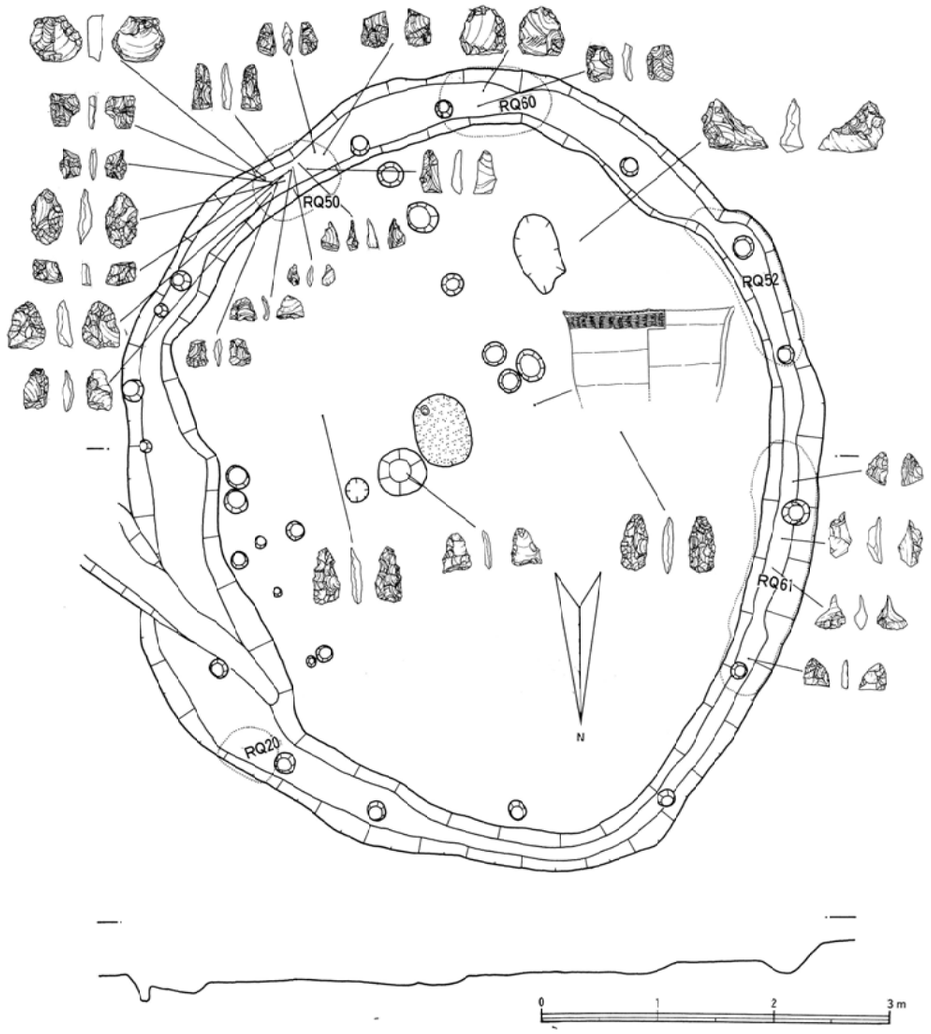
土器は発見されなかった。

埋土－住居跡内の埋土は三枚に分けられ，レンズ状に堆積状況を示す。

第１層　明褐色粘質土，全体的に微量の木炭粒を含んでいるが遺物は検出されない。

第２層　明黄茶褐色粘質土，ハードなローム質を有するもので，小量の木炭粒，それに層下面に多量の石器が確認された。

第３層　明黄褐色粘質土，微量の石器片を含むシルト質の土層で，壁が崩れて堆積した層もしくは小量の砂粒を含むことから流れ込んだものと考えられる。



第５図　千松寺遺跡　ＳＴ２平面図

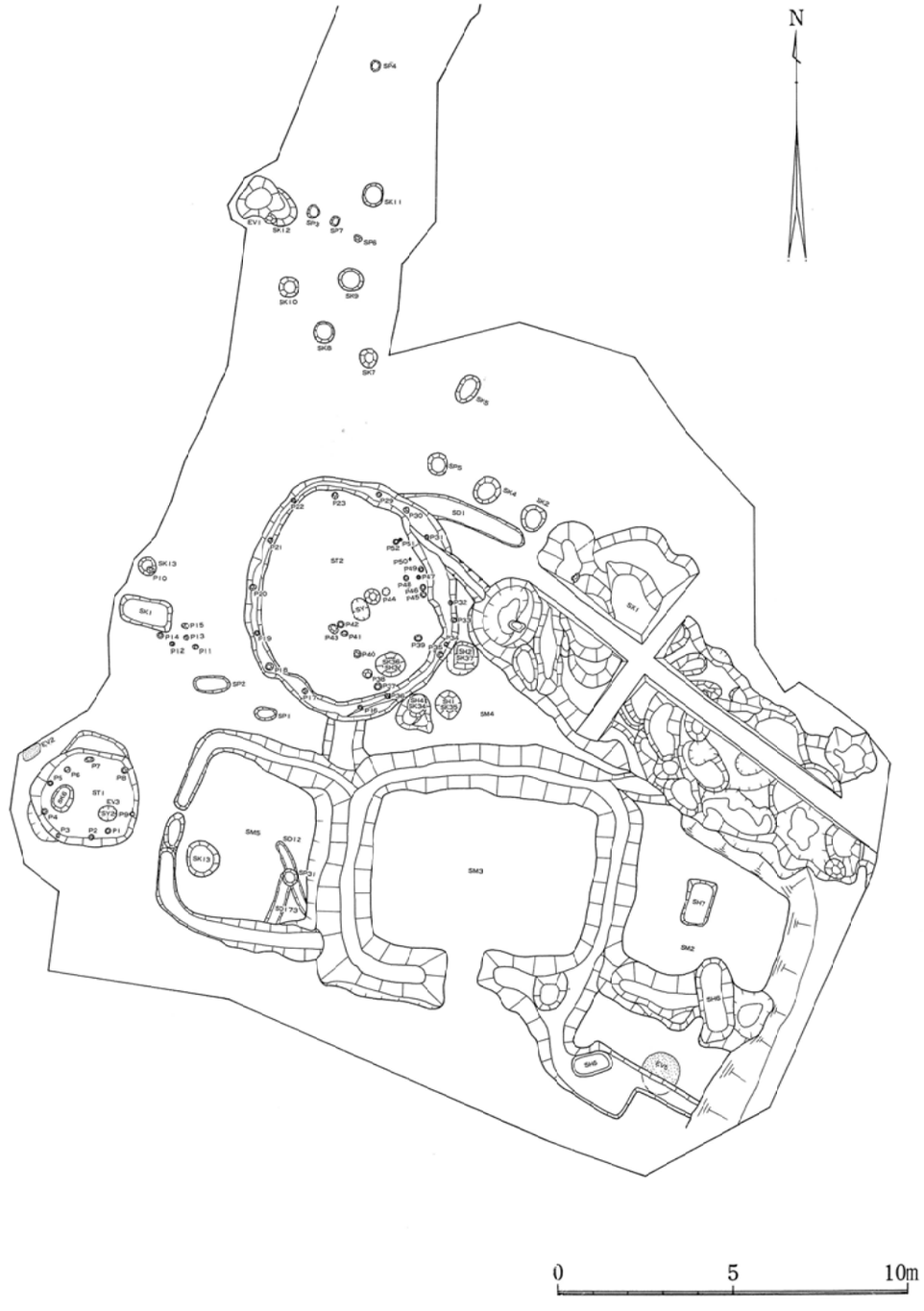
◦ＳＴ２［第３図・第５図・第６図・第４ｂ図版］

17～20－9～13区にかけて検出したもので，ＳＭ４の下面に確認された。第Ⅲ層を掘り込んで構築しており，長径（南北方向）７ｍ・短径（東西方向）６ｍのほぼ円形を呈す竪穴住居跡である。

壁――壁の立ち上りに周溝が伴う形態を有し，壁はなだらかで床面までの深さは10㎝～20㎝位，周溝も幅30㎝～最大幅90㎝と一定せず，深さは（床面より）10㎝～18㎝を測る。

床面――ほぼ平坦で西から東にゆるやかに傾斜している。

柱穴－周溝内に存在する16基が主体をなすものとみられる。



第６図　千松寺遺跡Ａ拡張区遺構平面図

炉－住居中央南よりに位置するもので，長径65㎝，短径46㎝，深さ3㎝を示めす楕円形の地床炉で，南壁側にこぶし大の焼けた礫が設置している。

遺物－　炉（ＥＶ４）付近の床面より検出した第14図－１の早期土器と周溝内に廃棄したと推定されるＲＱ20（Ａブロック）ＲＱ50（Ｂブロック）ＲＱ52（Ｃブロック）ＲＱ60（Ｄブロック）ＲＱ61（Ｅブロック）の５ヶ所に亘って存在し，中でもＢブロックの第12図－30とＥブロックの第12図－35の資料とが接合するなど興味ある資料が検出されている。

特に各ブロックの石器については後述する考察の中で詳しく述べることにする。

◦塚群（ＳＭ１～ＳＭ５）［第３図・第６～９図・第２～３図版］

Ａ拡張区に群集する塚群で本調査区に４基（ＳＭ２～ＳＭ５），調査区外に１基（ＳＭ１）の計５基が存在し，調査区の西方１０ｍのカラ松林中にも５基の塚群（ＳＭ６～ＳＭ１０）が確認されている。ここでは今回の調査対象になったＳＭ２～ＳＭ５の４基のみを触れることにし，他の塚群は今後の調査で明らかにしたい。

今回の調査からすると，塚は方形プランを呈する土壇状の塚群で，何れも塚に沿って周溝が掘られて有り，塚の盛土をなすマウンドは第１次整地（塚を構築する前の地均）を用いて平面形状を呈し，その後３枚の版築を行なって上面を土壇上に整形するのが特徴とみられる。

ＳＭ１

ＳＭ２の東方向４ｍに位置するもので，今回の調査範囲には加わらないことから明確に出来ないが，現況では一辺５ｍ，高さ１ｍを測る方形状塚である。

ＳＭ２

ＳＭ３に接して構築するもので，東側部は道路によって破壊され，北側部も畑の開墾によって破壊されている。形状は破壊されているので明確に出来ないが，北側周溝の一部と南側周溝の一部より，径4.5ｍ～５ｍを有するものと考えられる。

周溝は東と北側部が破壊され，全体形状は不明であるが，北側の一部と南側周溝の状況より幅90㎝～130㎝をなすものと考えられ，南周溝をＳＨ６が切っているものの僅かにブリッチ状の張り出し部分が残っていることからＳＭ３と同様なブリッチを南側に存在することが予想される。周溝の深さは北側で25㎝，南周溝最深部72㎝を呈し，断面は「Ｕ」字形状をなす。

塚を構築するマウンドは，５枚の版築を基本とするが，第Ⅴ層は塚を構築する最初に実施した整地層で，特に念入に版築を施こしている。塚の中央部分には第Ⅴ層面を掘り込んであるＳＨ７が呈し，主軸を南北に長径110㎝，東西60㎝，深さ22㎝をなす方形状の土壙が設置する。内部からは多量の木炭とともに焼骨片，古銭６点，３㎝位の円形小礫49点が

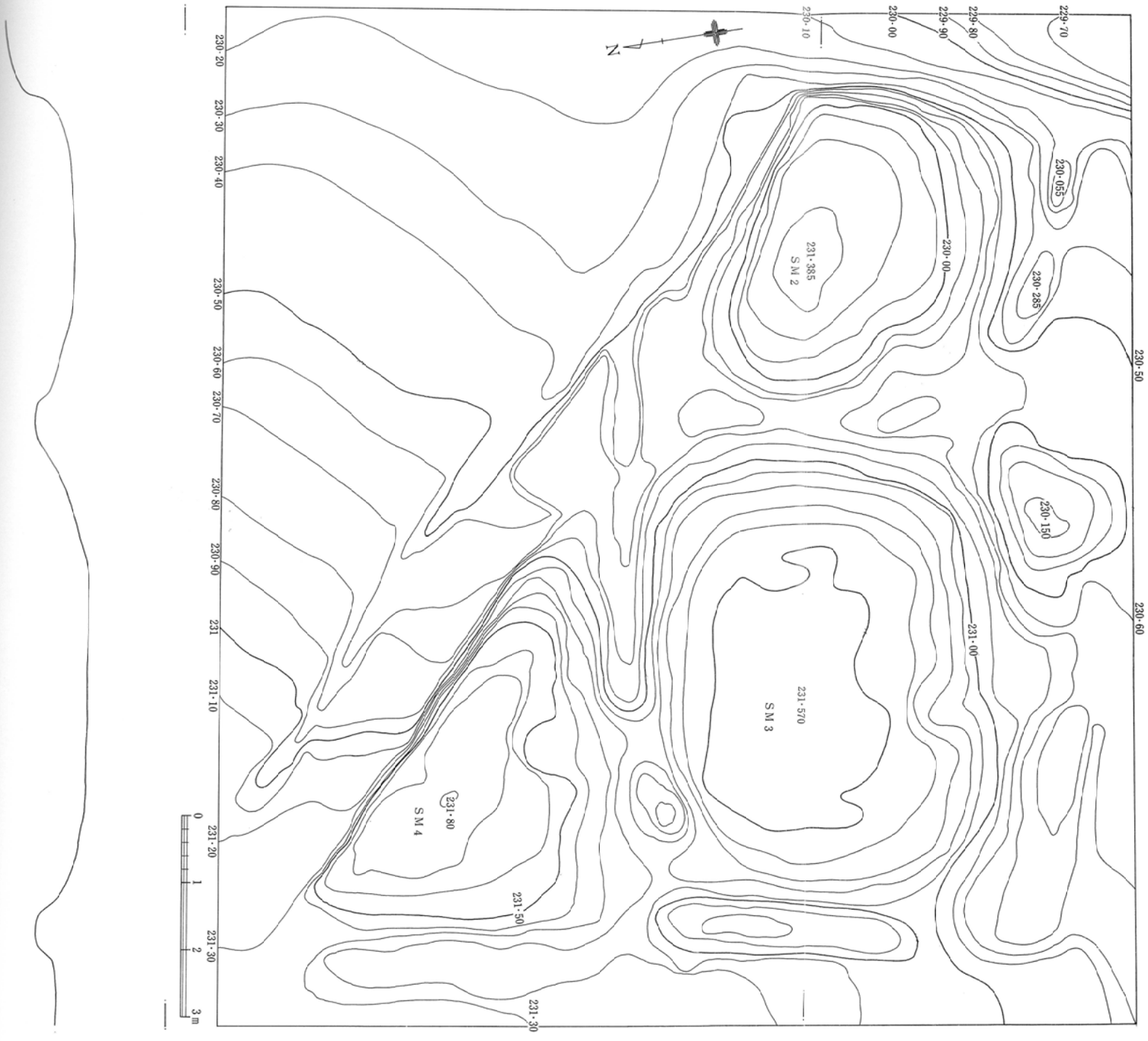
径65㎝，短径46㎝，深さ3㎝を示す楕円
が設置している。
した第14図－1の早期土器と周溝内に廃棄し
（Bブロック）RQ52（Cブロック）RQ60
に亘って存在し，中でもBブロックの第12図－30
するなど興味ある資料が検出されている。
考察の中で詳しく述べることにする。

-9図・第2～3図版 ］
（SM2～SM5），調査区外に1基（SM1）
ラ松林中にも5基の塚群（SM6～SM10）
になったSM2～SM5の4基のみを触れる
こしたい。
呈する土壇状の塚群で，何れも塚に沿って周
は第1次整地（塚を構築する前の地均）を用いて
って上面を土壇上に整形するのが特徴とみられる。

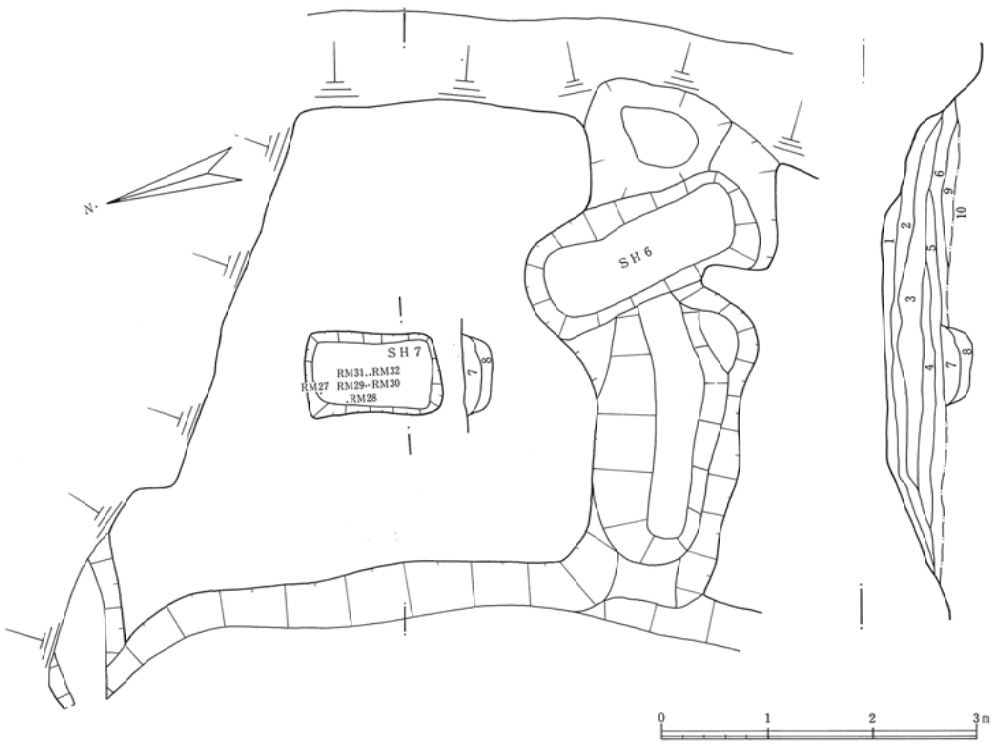
回の調査範囲には加わらないことから明確に出
る方形状塚である。

道路によって破壊され，北側部も畑の開墾に
るので明確に出来ないが，北側周溝の一部と
るものと考えられる。
不明であるが，北側の一部と南側周溝の状況
南周溝をSH6が切っているものの僅かにブ
らSM3と同様なブリッチを南側に存在する
㎝，南周溝最深部72㎝を呈し，断面は「U」

本とするが，第Ⅴ層は塚を構築する最初に実
いる。塚の中央部分には第Ⅴ層面を掘り込ん
)㎝，東西60㎝，深さ22㎝をなす方形状の土
焼骨片，古銭6点，3㎝位の円形小礫49点が



第7図　千松寺遺跡　SM2～4測量図



第8図　千松寺遺跡　ＳＭ２平面図

検出され，土壙の壁ないし内部は赤褐色に変色し焼けた痕跡を残している。

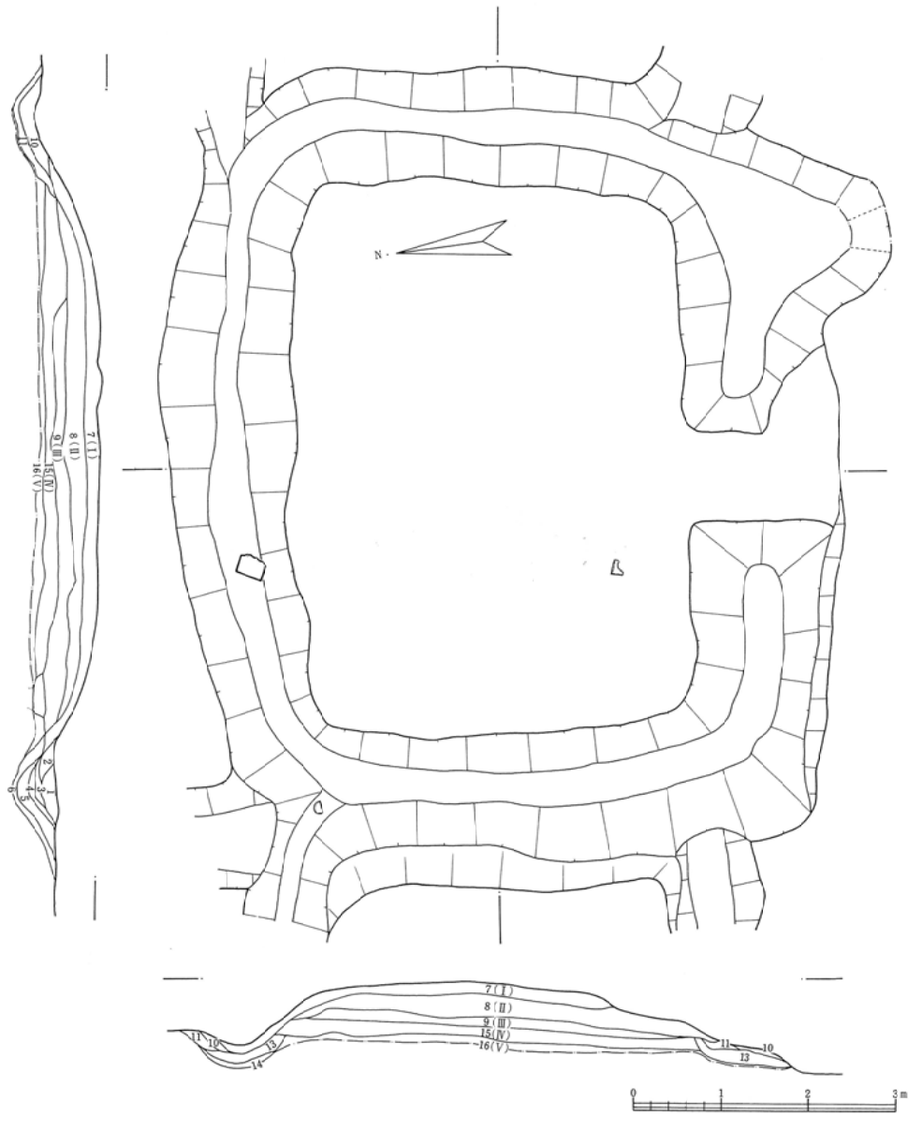
遺物はＳＨ７内より検出された古銭６点の他，中世陶器10点・石器20点がある。

第１表　ＳＭ３層序一覧表

層No.	土　色	備　考
1	黄褐色粘質土	％3cm位の小礫を含む
2	黄褐色粘質シルト	〃
3	暗黄褐色粘質シルト	〃
4	黄褐色シルト	若干の小礫を含む
5	明褐色粘質土	
6	明褐色粘質シルト	
7	暗褐色シルト	
8	黄褐色粘質シルト	
9	黄褐粘質土	
10	暗黄褐色粘質土	
11	褐色粘質土	
12	暗褐色微砂質土	
13	暗黄褐色微砂土	
14	明茶褐色粘質土	
15	明褐色粘質シルト	
16	黄茶褐色粘質土	１次整地層

第２表　ＳＭ２層序一覧表

層No.	土　色	備　考
1	暗褐色シルト	
2	黄暗色粘質シルト	
3	〃	黄褐色粘質土混入
4	黄褐色粘質土	
5	暗黄褐粘質シルト	
6	暗褐色シルト	
7	明褐色シルト	
F 1	暗黄褐色粘質土	小量の木炭粒を含む
F 2	木炭層	多量の骨片，焼土を含む



第9図　千松寺遺跡　ＳＭ３平面図

◦ＳＭ３

今回調査した塚群の中では最も保存が良好な塚である。東側にＳＭ２，西側にＳＭ５，北側にＳＭ４と接し，丁度ＳＭ３はその中間に位置する。

東西6.7ｍ，南北4.4ｍと東西に長い長方形状プランを呈し，コーナー部に丸味を示めすのが特徴となる。塚の上部はほぼ平坦であり，北側部に小礫を集結した集石と五輪塔の一部と推測される石塔片１点が検出している。

周溝は塚に沿って掘られ，一部南中央にブリッチを残す。溝の断面は「Ｖ」字状ないし「Ｕ」字状に斜に掘り込んでおり，幅1.3ｍ～1.5ｍ，深さ20㎝～39㎝を計る。また北周溝底部面と北西コーナーの底面からは五輪塔の一部が検出され，特に北溝より発見された石塔片と塚上面より検出された石塔が接合することが判明し，本塚構築の際に五輪塔を設置していたことが予想される。

塚を形成する埋土は基本的に５枚に分けられ，第Ⅴ層（№16）を整地層として，その後Ⅳ層～Ⅰ層に亘って明瞭な版築を施こしてある。

遺物は中世陶器片５点，石器20点位がⅠ層～Ⅴ層にかけて検出されている。

◦ＳＭ４

本塚も畑の開懇によって北側約半分位が破壊され現形を失なっているが，周溝の状況から一辺７ｍを有する方形プランの塚と考えられる。

周溝は北側と西側，それに南側はＳＭ３と接してあり，幅190㎝～130㎝位とみられる。マウンドをなす盛土は５枚を要し，第Ⅴ層面（整地層）を掘り込んで，ＳＨ１～ＳＨ４の４基の土壙墓が設置されており，何れも円形プランを呈し，ＳＨ１は長径82㎝，短径70㎝，深さ45㎝，ＳＨ２は長径103㎝，短径90㎝，深さ44㎝，ＳＨ３長径84㎝，短径70㎝，深さ35㎝，ＳＨ４長径115㎝，短径90㎝，深さ45㎝を測り，すべて埋土は人工的堆積状を示す。遺物は検出されなかった。

◦ＳＭ５

ＳＭ３の西側に接するもので，塚の上部は既に畑等の開墾によって破壊され，周溝のみが検出されている。

周溝は西側にブリッチを残し，50㎝～80㎝，深さも西溝で５㎝～10㎝，他は15㎝～20㎝と浅く，大きさも周溝も含め長径６ｍ，短径５ｍと他の塚と比べ小規模である。

なお内部にはＳＫ13，ＳＤ12，ＳＤ13，ＳＰ31が存在するが，本遺構には伴なわないものとみる。

柱穴群［第6図・第10図］

B拡張区・C拡張区に亘り95基の柱穴跡と考えられる遺構が存在する。前者のB拡張区は45基あり，円形状に配されているSD7～10を中心として分布するもので，切り合い関係より時期差を異にした建物跡が重複するものとみられる。

柱穴の大きさは20㎝～30㎝前後が主で，30㎝～60㎝と比較的深い掘り方をもち，掘り方の形状は全て方形状を呈する。

遺物はP113内より検出された第14図9とSD7内より検出された表面に「タタキ」を有する須恵器甕形土器の破片1点がある。P133内検出された須恵器坏は回転ヘラ切り無調の底部切り離しをもつ坏片で道伝Vb層と平行する特徴をもつ。

一方後者のC拡張区はSD5内に分布する柱穴群で，円形プランの掘り方をもつ柱穴跡が17基あり，径20㎝～50㎝，深さ10㎝～36㎝を測る。

遺物はSD5より中世陶器8点と柱穴群内から青磁片3点，中世陶器9点の計20点がある。

以上の柱穴群は両者とも柱穴の掘り方，断面のセクション状況の吟味より，明らかに建物跡の存在が考慮され，前者は方形状の掘り方をもつ建物跡，後者のB拡張区はSD9，SD10と関連をなす円形状の掘り方をもつ建物跡が考えられる。

溝状遺構［第3図・第6図・第10図］

B拡張区・C拡張区を中心に13基確認されている。C拡張区の柱穴群に配されてあるSD5は深さ8㎝～60㎝，幅80㎝～120㎝をなすもので，東西を横断するSD6に合流し，両者とも底面位より中世陶器片が検出していることからSD4ともに柱穴群（建物跡）に密接な関係を有するものとみたい。

B拡張区からはSD7～SD11の溝状遺構が存し，SD11を除く他は円形状に呈されており，何れも5㎝～15㎝と浅い掘り込みをもつ中で，切り合い状況を有している。

一方溝状遺構内を中心として分布する柱穴群に関しても数期に亘る切り合状況が認められ，溝との関連を強くするものと考えられる。

A拡張区ではSD1とSD2があり，SD1は3～4㎝位の浅い掘り込みをもつもので溝の状況からSM4の周溝と思われる。SD2は「U」字状をなす幅50㎝～150㎝，深さ5㎝～25㎝を測り底面は「U」字状形を呈し，遺物は検出されなかった。

すべて溝状遺構内の埋土は交互に堆積状況を示す自然堆積であった。

考えられる遺構が存在する。前者のＢ拡張
～10を中心として分布するもので，切り合
うものとみられる。
30㎝～60㎝と比較的深い掘り方をもち，掘

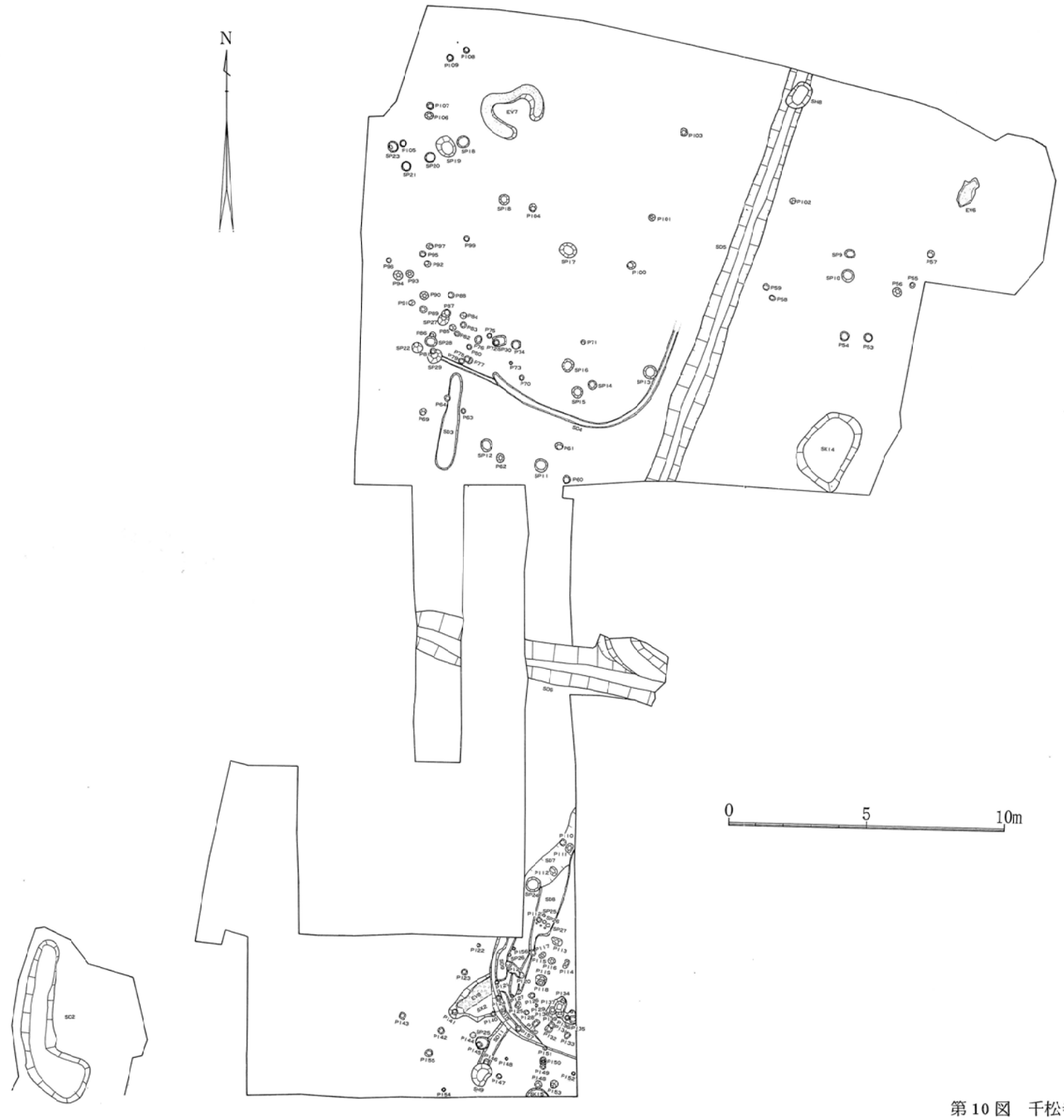
ＳＤ7内より検出された表面に「タタキ」
133内検出された須恵器坏は回転ヘラ切り
に平行する特徴をもつ。
柱穴群で，円形プランの掘り方をもつ柱穴跡
36㎝を測る。
から青磁片3点，中世陶器9点の計20点があ

面のセクション状況の吟味より，明らかに建
方をもつ建物跡，後者のＢ拡張区はＳＤ9，
建物跡が考えられる。

ている。Ｃ拡張区の柱穴群に配されてある
をなすもので，東西を横断するＳＤ6に合流
ていることからＳＤ4ともに柱穴群（建物跡）

群が存し，ＳＤ11を除く他は円形状に呈され
もつ中で，切り合い状況を有している。
群に関しても数期に亘る切り合状況が認めら

1は3～4㎝位の浅い掘り込みをもつもので
2は「U」字状をなす幅50㎝～150㎝，深
，遺物は検出されなかった。
を示す自然堆積であった。



第10図　千松寺遺跡　ＢＣ拡張区遺構平面図

○近世の遺構

7基の遺構が認められ，何れも埋葬形態を示すもので，遺構の状況より火葬跡と墓壙とに大別できる。

a　火葬跡

A拡張のみに存在するもので，円形及び楕円形状プランをなす3㎝～5㎝の浅い土壙状に構築し，内部は大量の木炭と焼土，それに人骨片と推定される焼骨がみられた。

大きさは1ｍ～1.3ｍ位を有するもので，火葬跡と理解したい。遺物は陶磁器片数点がＥＶ5より検出されたのみである。

b　墓壙［第3図・第6図・第10図］

調査全体に点在する遺構であり，ＳＭ4整地面に構築されたＳＨ1～ＳＨ4を含め9基がある。うちＳＭ4・ＳＭ2は塚に伴う施設として分けられることから，ここでは他の墓壙のみ説明を加える。

塚内の墓壙を除くものとしてＳＭ2の南周溝を切って構築する長径190㎝，短径50㎝，深さ40㎝のＳＨ6，同南方3ｍに存する長径110㎝，短径55㎝，深さ68㎝のＳＨ5，Ｂ拡張区に位置する長径84㎝，短径60㎝，深さ30㎝のＳＨ9，Ｃ拡張区に存在する長径1ｍ，短径70㎝のＳＨ8の4基がある。形状はＳＨ9を除く他は長方形プランを呈し，埋土は5枚～7枚で人工的堆積状況を示している。

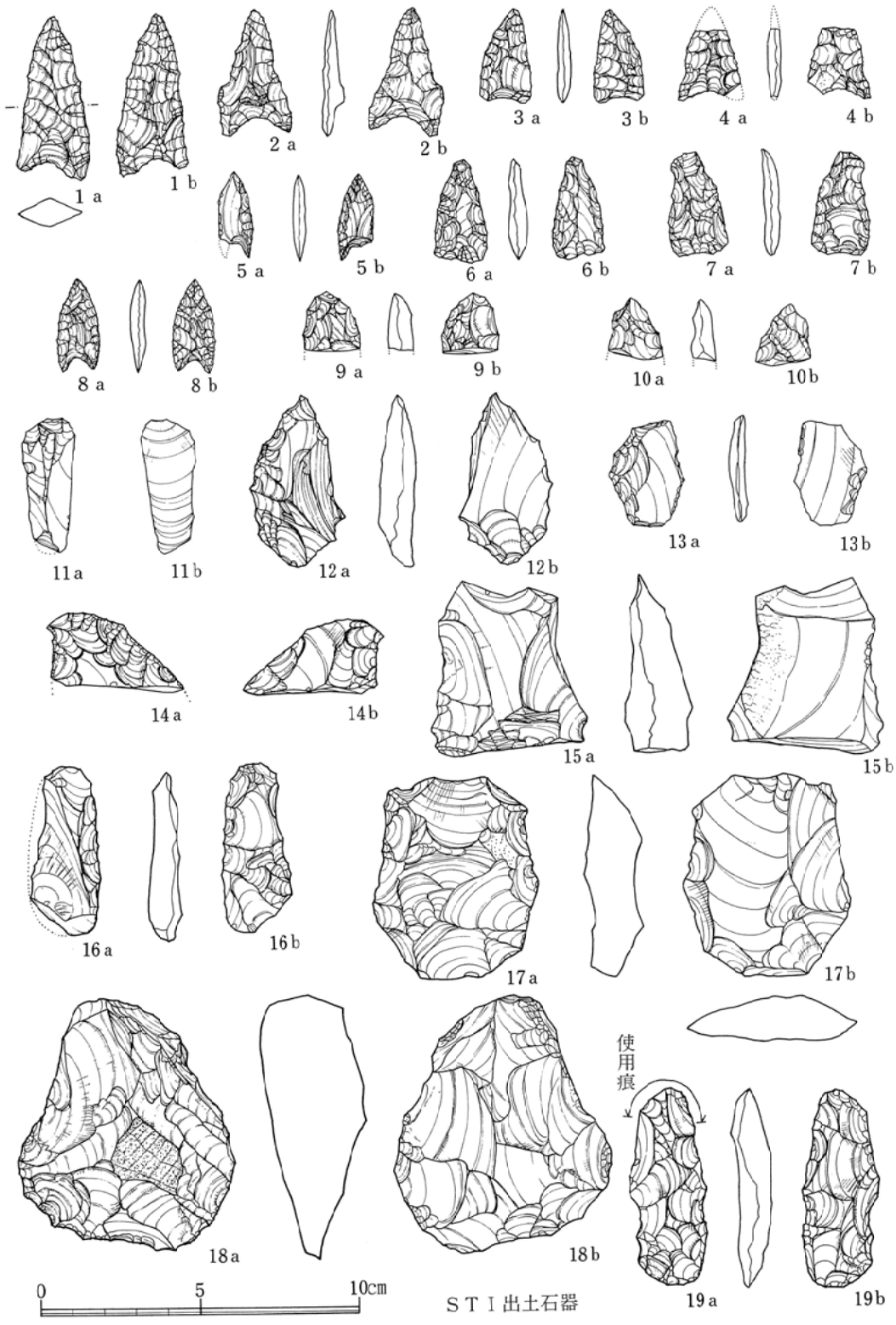
検出された遺物はＳＨ5より寛永通宝1点，ＳＨ6より洪武通宝1点，ＳＨ9より寛永通宝6点，ＳＨ8よりも寛永通宝6点等の古銭のみが出土している。中でもＳＨ8からは古銭6枚を藁で結んだ状況で発見されるなど，6文銭埋納形式として把握することが出来る。年代的には明治9年・同12年に当地を伝染したと言われるコレラ死亡者の埋葬形態と思われ，本遺跡付近に同様な伝承も残ることも参考となる。

Ⅴ　遺　　物

本遺跡から検出された遺物は整理箱にして10箱があり，その大半が石器類で占める。遺物の多くはＡ拡張区と称される遺構内からが最も多く，次いでＣ拡張区・Ｂ拡張区の順で検出された。時期的にはＢ拡張区第Ⅳ層面より出土した旧石器4点を初め，Ａ拡張区からは縄文早期，同前期の遺物を中心として，Ｂ拡張区，Ｃ拡張区からは中世期の遺物が主体的にみられた。ここでは主に石器・土器と大別し，簡単にその概要を記すことにする。

1　石　器（第11図～第13図・第15図・第5図版～第8図版）

Ａ拡張区の遺構内を主に8856点があり，次の11類に細別することが可能であった。



ＳＴＩ出土石器

第 11 図　千松寺遺跡出土石器実測図

a類（第13図45～48・第6図版）

縦長のフレークを素材とした石刀類で，4点ある。何れも先端を鋭く尖らせるのが特徴とし，形態的に2類に分けられ，b面に使用痕をもつ。

a^1類－打面調製を有するもので，a面に一条の稜とb面にバロブを残している。45はa左大縁部を斜よりの加工を加えて先端部を作り，右縁への細加工を施して刀部を構成するに対し，46は両b縁面の加工で刀部を作り出している。

a^2類－前者と比べ薄手の素材を呈し，a面に二条の稜を持ち，バロブを除去するのが特徴で全体に巾太とb面位の加工を示さない特徴をなす。

b類（第11～13図・第5～8図版）

石鏃の仲間として認められるもので，20点存在する。大半が破損したものが多く，廃棄された石器の状況から考慮して，石鏃製作工程を吟味することが可能であった。

ここでは素材から完成工程を下記のb^1類～b^4類に大別して述べる。

b^1類（第12図）

素材（フレーク）に対し最初に外形加工を施こした石鏃に分類される。28はa右縁加工b左縁加工を施したのみで，39はさらに両縁の外形加工を加えている。43はa面を中心にb両縁の外形加工を呈している。

b^2類（第11図）

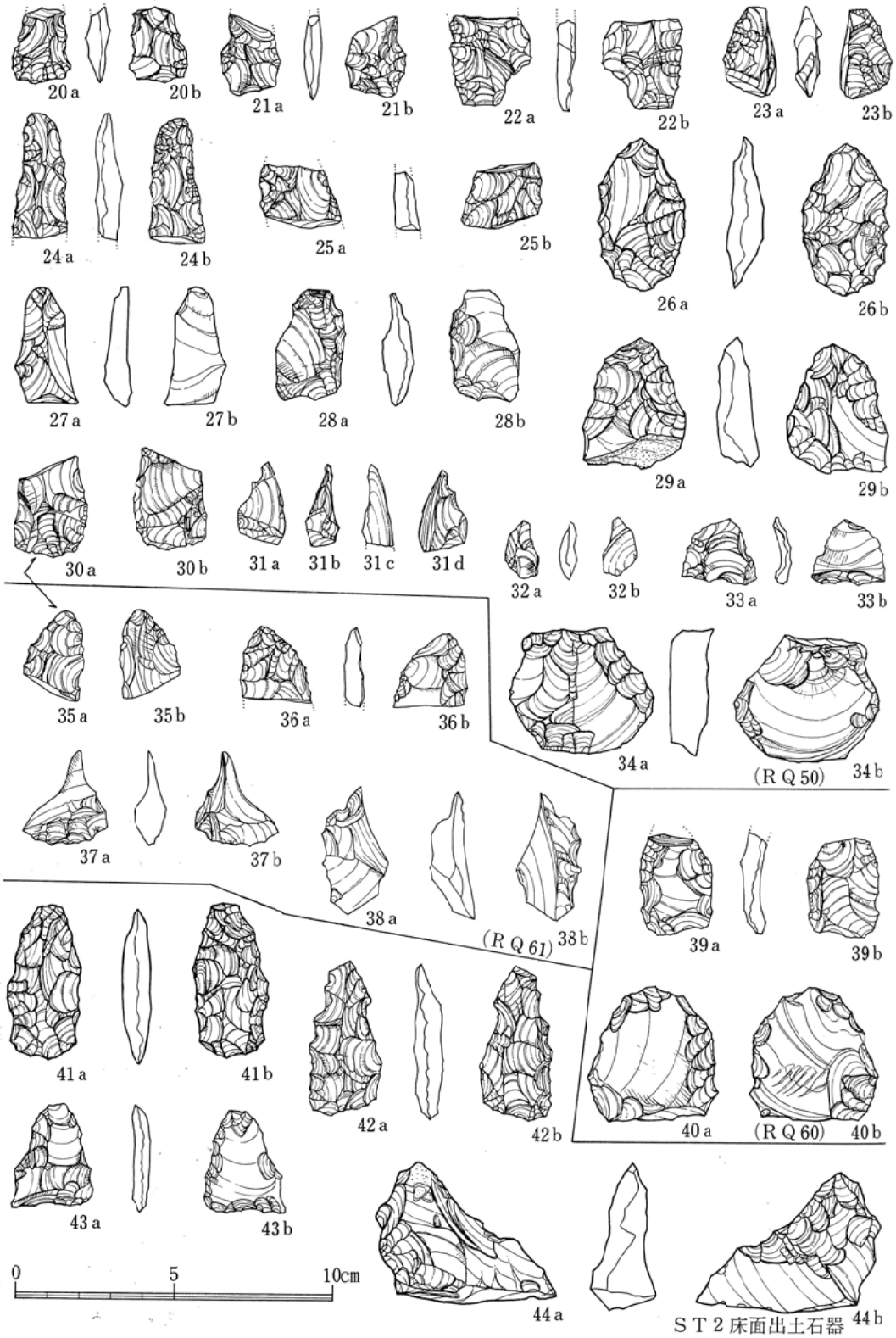
二次的な外形加工を施したグループであり，両縁の調製を主とする。7は両側面を中心とした剝離を有し，先端・基部加工には至っていない。9・10は先端部の破損した石鏃品であり，先端部の調整には至っていなく，21は対象に先端が破損した失損したものであり，両側面の加工にとどまっている。

b^3類（第12図）

前類（b^2）からさらに基部・先端部それに側面の打面調整を有するグループで，6は基部と一部先端部の調整を呈し，22・25は打面調整まで至った破損品であり，30・35・36も同様に基部・先端部・側縁の打面調製を終了した石器で，その段階で破損した接合資料である。

b^4類（第11・13図）

最後の調整を行なったグループで横位から縦長細片状に剝離する加工を施したグループであり，1は基部がゆるやかに内湾する縦長石鏃，8は強く内湾するもので，3は基部の加工を有していない石鏃とみられる。2は1と同形状を有するものとみられるが，a中央面の打点痕が残って剝離不態と化した失敗品と考えられ，4は先端部，基部の破損品，5は8と同形態の基部失損品，49・50も基部，先端部の破損品と考えられる。



第 12 図　千松寺遺跡出土石器実測図

c類（第12・13図）

先端の尖った両面加工の石器（石鏃を除く）を一括して本類に含めた。52を除く他は縁片より鋭い加工を施こすのが特徴で，何れも基部を平坦に呈している。

形態的には二等辺三角形状を有するもの42・53・54・57・縦長の二等辺形状を有するもの55・56・基部がやや丸味を有する肉厚の三角形状を有するもの51・細部調整を施した二等辺三角形状を有するもの52と大きく4グループに細別することが可能であるが特にここでは一括して先尖状石器として扱いたい。

ただし，55は一見石槍的であるが，先端部に著しい磨滅痕（使用痕）が認められ，石槍とは異なった使用法が吟味される。

d類（第12図）

基部に丸味をもつ両面加工の石器であり，c類に大変類似する。26はb面に主要剝離を示すもので先端が尖状に施こしてある。41は両面とも主要剝離を有しており先端部は，前者と比較してゆるやかな曲面をもつ。箆状石器と扱いたい。

e類（第11・12図）

両端に丸味を有する縦長の箆状石器である。周辺から明瞭に加工を両面に施こすのが特徴である。

f類（第13図）

箆状石器の代表的形状を呈するもので，最大径を基部に置く。60は両端に丸味を呈する両面加工の箆状石器であり，先端，基部に主要剝離を施し先端部に磨滅を有した使用痕がみられる。61は先端部が破損した箆状石器であり，先端部をa面から再調製を加えている。

g類（第13図）

方形状をなす箆状石器であり，58はa面に主要　　を呈し，b面は右縁部のみに加工を施してある。59は周辺より剝離を加えた両面石器で，b面に主要剝離を有している。

h類（第12図）

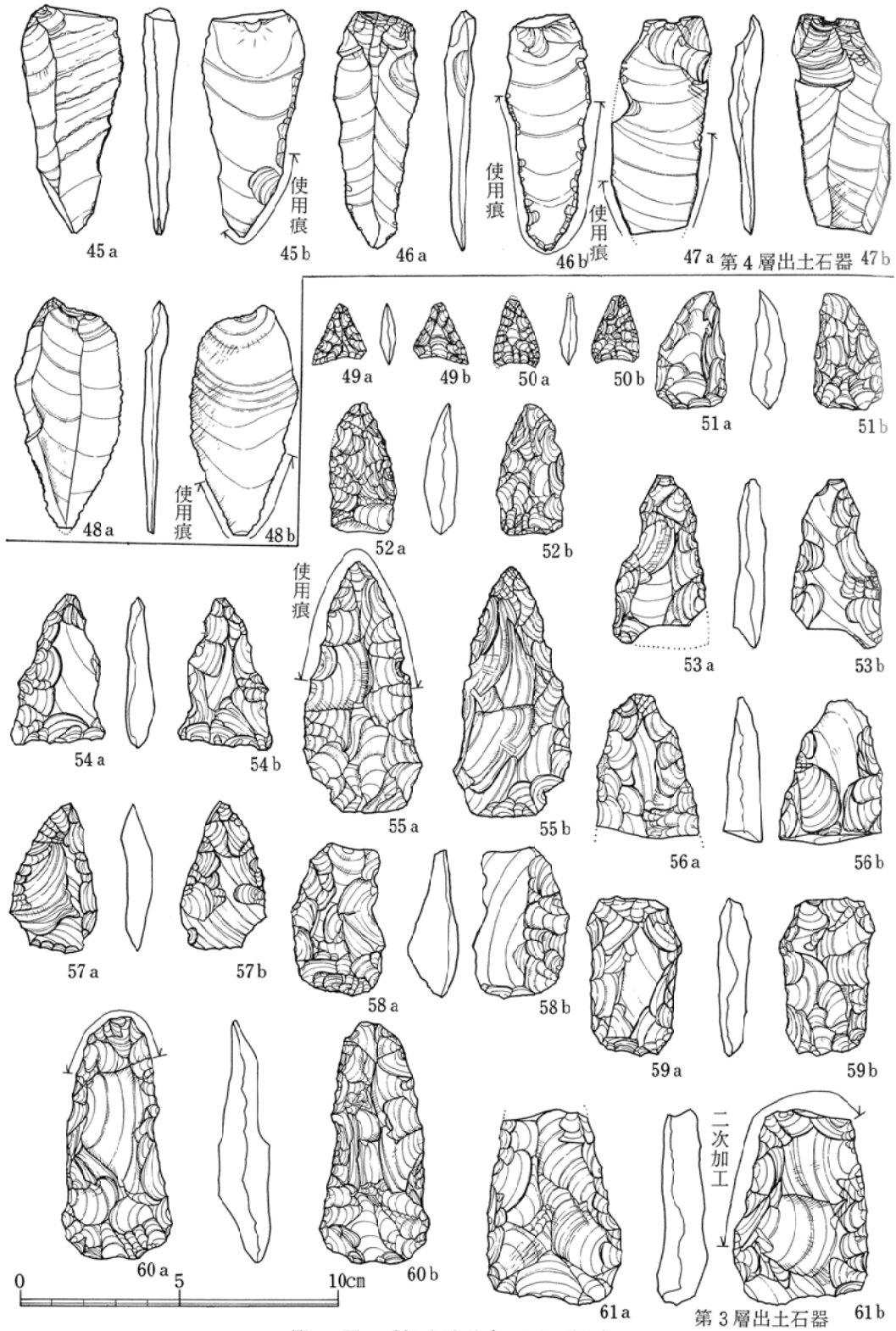
円形状を呈するグループで，両縁面からかるく加工を施している。34はa面の上縁と基下縁部より主要剝離を加え，b面はバロプを除去してある。箆状石器の仲間と考えたい。

i類（第11・12図）

石器製作途上，もしくは使用後の円調整の段階で破れた破損品であり，7点存在する。この中で，31～33は石鏃片，12・14・37・38は箆状石器片とみられる。

j類（第11図）

不定形石器として扱われるものを本類とした。13は剝片の両側縁に加工を加えた石器片であり，17は両面加工を有する方形状石器で外形状を整えた段階の箆状石器とも考えられ



第13図　千松寺遺跡出土石器実測図

る。18は三角形状を有する肉厚の両面加工品であり，a面を主要剝離として明瞭に加工を施している。私はa面に主要加工を呈する両面加工の尖状部を構成する石器である。

k類（第12図）

打面調製を施したフレークで両者ともバロブ面を除去している。

2　土器（第14図1～15・第9～10図版）

検出された土器はA拡張区～C拡張区を含め110点有り大半はA拡張区出土によるものであった。年代的には縄文早期中葉期，同前期末～早期初頭，同前期末それに塚群出土中世陶器をA拡張区から，平安初期，中世陶器を中心としてB拡張区，C拡張区からは中世陶器がそれぞれ検出されている。

A群土器（第14図－1・第9図版）

ＳＴ2の床面直上からの検出されたもので，第14図－1の他に3点ある。14図1はゆるやかな波状口縁部を呈す深鉢形土器と思われ，幾分外反気味の口縁から同部でふくらみ底部へ垂下する尖底もしくは丸底を示すものと考えられる。現口径は22 cmを測る。

文様は「クシ」状工具ならびに貝殻復縁を横位に引き出して施文する手法を特徴とし，他は無文で統一している。口唇部は棒状工具工員によるキザミが示され，焼性は比較的良い。

B群土器（第14図－2・第9図版）

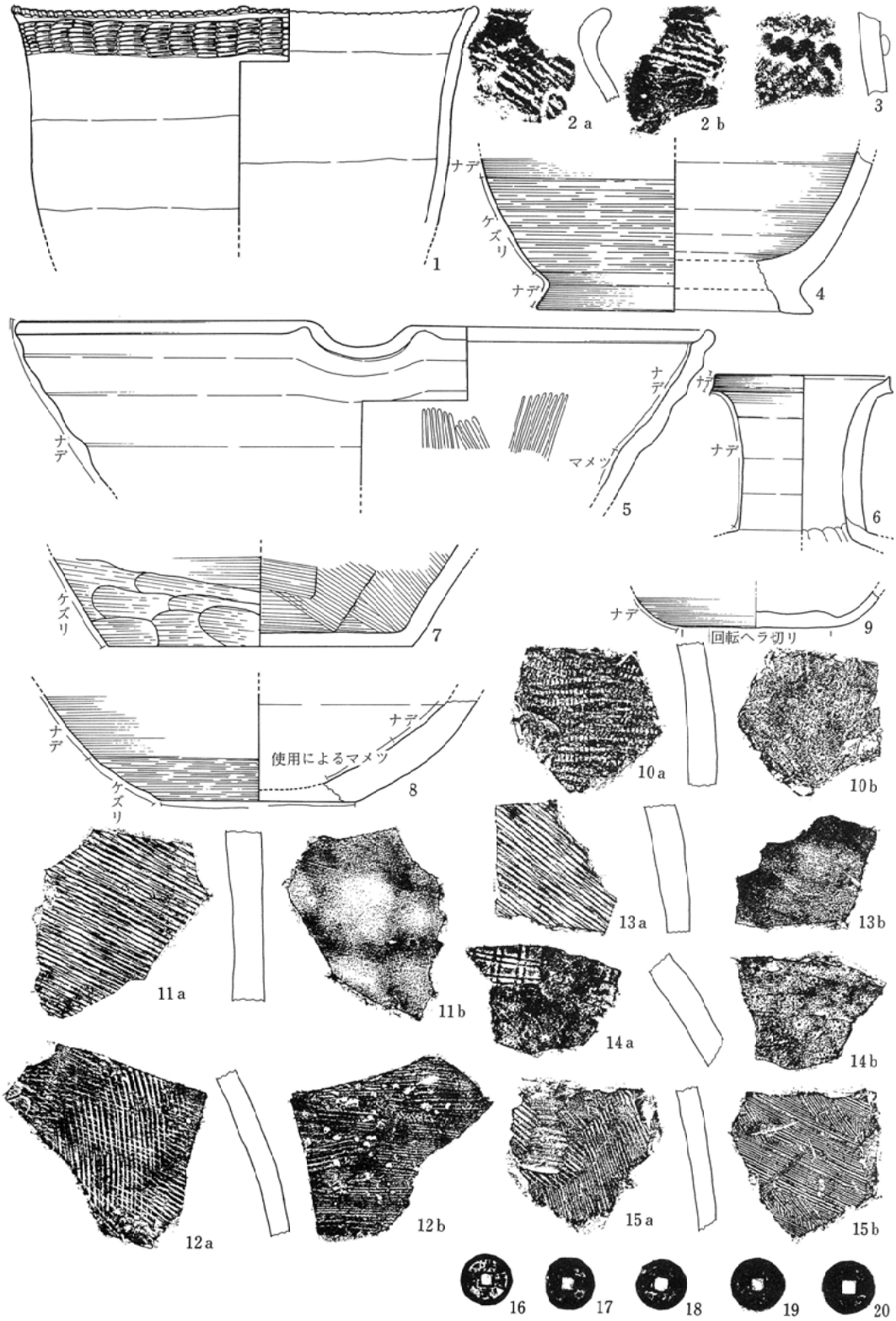
第Ⅲ層面出土土器で15点検出されている。撚糸縄文を施文とするグループで，14図－2は強く外反する口縁を呈し，表裏撚糸文を呈し，胎土に多量の繊維を含み焼性は良く，色調は暗黄褐色を呈す。

C群土器（第14図－3・第9図版）

第Ⅱ層下部（A拡張区）より50点検出している。何れも磨滅が著しく，文様が明瞭に判別出来るものは少ない。14図－3は頸部片で，R2単節斜縄文施した後に粘土紐を貼付したもので，縄文前期の所産とみられる。

D群土器（第14図－4～15，第10図版）

塚群・C拡張区を中心に検出されたもので，100点ある。何れも破片が多く全体の器形は明確に出来ないが，7・8は甕形土器4は高台を有する壷形土器と考えられ，両者とも底部付近がケズリを呈する。5は片口を有する擂り鉢であり，内面は磨滅（使用痕）が認められ，外面はナデを有する。6は長首をなす壷形土器であり，口唇部が外反気味に広がっているのが特徴とする。9は底部の切り離しをヘラ切りを示す坏片であり，道伝Ⅴa層出土土器に類似性をなす。10～15は甕形ないし壷形土器の胴部片と考えられ，11・13は表面を斜位のタタキ，裏面を円礫等による当痕をなす。10は板状タタキ目をなし，14は格子状庄痕を有し，12・15は表面を細線状タタキ目，裏面をハケ目状の調整を呈している。



第 14 図　千松寺遺跡出土土器実測拓影図

年代的に明確に出来ないが，９を除く他は中世陶器の範疇に属するものとみたい。
なお６～８はＳＭ１よりの出土で塚の年代を位置付る資料として注意されよう。

３　その他の遺物〔第11 a 図版〕

石　　塔

ＳＭ３の上面F_1と同溝より検出されたもので材質は砂岩で造られており，五輪塔の一部と考えられる。五輪塔の場合下より３段位に位置するものと４段位に位置するものである。五輪塔は密教で森羅万象を表わすものとして，３段位に位置する石を△に作り「火」を表わし，４段位は▽に作り「風」を表わすものである。火を表わす石材の大きさは横31．５㎝，高さ17．５㎝で上の部分は丸く凹があり，上の石材がはめ込むように作られている。風を表わす石材は直径10㎝，高さ７．５㎝であり，２つとも材質は同じである。

石材の形より，鎌倉期に類似する所があるが，地域性の違いも考慮され本橋では時期決定はひかえたい。

古　　銭（第116図版）

検出された古銭は六道銭として埋葬されたものであり，埋葬された年代により，古銭の種類が異なることがみとめられる。ＳＭ４のＳＨ１～４からは検出されなかったが，ＳＭ２の主体部と推測されるＳＨ７からは腐蝕が著るしい熙寧元寶１，元祐通寶２，紹聖元寶２，不明銭１の六枚検出されたため，この中で不明銭（ＲＭ27）の材質が外の５種類と違い，銀を含有していると考えられる。他に出土したのは永楽通寶，寛永通寶，洪式通寶の古銭である。

Ⅵ 総　　括

1. 遺　　構

今回検出された遺構はＡ～Ｃ拡張区の三ケ所に亘って検出され，地形・立地条件を吟味した遺構の種別して把握される。たとえば縄文期遺構は舌状先端部のＡ拡張区・平安期はなだらかな斜面を呈するＢ拡張区・鎌倉期は平坦なＣ拡張区・同塚群は一段高いＡ拡張区に分布する。この中で，特に重要と思われる縄文早期遺構と鎌倉期の塚群を中心に検討してみよう。

ＳＴ１

貧弱ながらにも竪穴住居形態を有しており，床面付近より検出された石器から石器製作を意図とした工房跡と考えられる。特に石器としては石器10のうち完成品２点・未完成品３点，失敗品５点の石鏃が検出されていることから石鏃を中心とした石器製作工房跡とみたい。時期的には年代を決定する資料が得てないので不明であるが，第Ⅲ層面を掘り込んでいることからＳＴ２と同様な縄文早期として位置付けたい。類例としては青森県大畑遺跡⑥がある。

ＳＴ２

６ｍ×７ｍを有する竪穴住居跡で，現在県内最大規模をなす⑦。住居壁直下には周構が存在し縄文早期住居跡としては類例が少ないだけに注目される。時期的には床面直上から検出された土器より縄文早期の大寺式に併行するものとみられる。

一方周溝内からはＡ～Ｅブロックに亘って石器片が廃棄された箇所が発見されており，周溝底部面を中心として8153点検出している。この中でＲＱ50（Ｂブロック）とＲＱ61（Ｅブロック）から検出されたb³類石鏃が接合することより廃棄された時期が短いものと理解され，廃棄された石器も失敗品，製作途上（この場合は断念）それに剝片があり，石器製作を実施した破片を廃棄したものと推測される。

ただし，ＳＴ２内で石器製作を実施し周溝内に廃棄したが，住居廃絶後に廃棄したかは難しいが，他の周溝（ブロック外）および，床面には数点を除く他は検出されなく，また破損して廃棄された石器の多くは石鏃を有することも注意されよう⑧。

塚　群

一辺４ｍ～７ｍを有する小規模な塚群であり，平面形状を方形状に有し，周溝が伴う。周溝はＳＭ２，ＳＭ３，ＳＭ５の状況から周溝の一端をブリッチ状に配するのが特徴と言える。

この塚群を内部形状の相異関係より三形態に分類することが可能である。

第１形態（ＳＭ２）

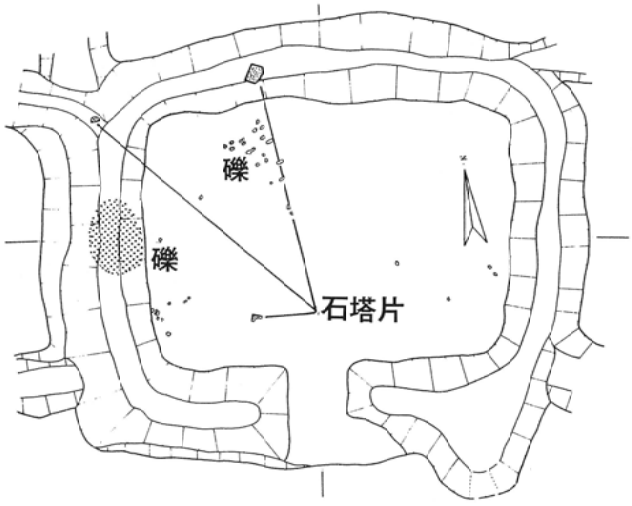
第１次整地後に方形状の土壙を構築し，火葬して墳墓を形成するもの。方形土壇状火葬墳墓と呼ぶ。

第２形態（ＳＭ３）

第１次整地，版築をへて土壇状に成形後，塚上に五輪塔を設置し，供養塚を構築するもの。方形土壇状供養塚と呼ぶ。

第３形態（ＳＭ４）

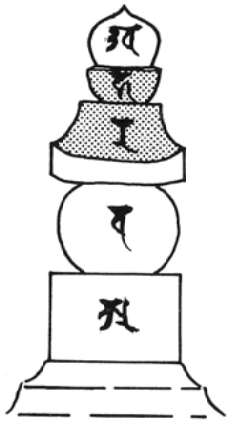
第１次整地を施し，その後土壙状の墓壙を配して塚を形成するもの。方形土壇状墓壙墳墓と呼ぶ。



千松寺遺跡ＳＭ３石塔及び礫検出状況

ＳＭ２の火葬をなす墳墓形態と類似する報告例として，鈴鹿市の東庄内Ｂ遺跡で方形５ｍ～６ｍのＶ字状の溝をめぐらし中央に土壙があり骨片を混えて下に焼土と板材の木炭化したものがあり，土壙がそのまま火葬場であることを示し，また，方形溝の内側平坦面の四隅に柱穴がある形式で鎌倉期と推定されている。今回のＳＭ２とは若干の差は示められるが，埋葬形態の一端を継承されているとも考えられる。

ＳＭ３の形態は平安末期より鎌倉期に流布された形態で，礫を１ｍ四方に敷き中央に60㎝前後の五輪塔を建てる墳墓標式形態があり，ＳＭ３の上面の一部で礫の一部が確認された。五輪塔（第11図版）は密教で説く宇宙の生成要素である五大を表わしたものであり，密教の標幟といえる。


五輪塔復元図

塚群の造成年代を明確にすることはできないが，ＳＭ２の土壙より木炭の中より検出された６文銭の中で，解読できるのは紹聖元寶２点元祐通寶２点，不明２点である。この２種の渡来銭はＡ．Ｄ 1087 ～ 1097年の貨幣である。また，塚群より中世陶器（第14図 6.7.8.10）が検出されたことと，本遺跡週辺（約 300 ｍ以内）から，鎌倉期経筒，完形の中世の甕が出土されていることから鎌倉期と見るのが妥当と思われるが。この地域での貨幣使用に関することも考慮しなければならない。塚同士の切り合いがないことで同一時期と見る。

県内における同様な塚状の調査例は飯豊町郡之神遺跡[9]，米沢市八幡原№27〔沼田土壇〕[10]

の２ケ所の遺跡がある。前者の郡之神遺跡は３段の段で構築する三段塚，後者の沼田土壇は同様に段を有するが，５段構築をなす。両者とも形状は方形プランを呈し，周溝の一部がブリッチ状に残ることなど今回の塚群に大変共通する特徴がみられる。

２　遺　　物

土器・石器・その他古銭・石塔等があり，うちでも大半がＡ拡張区より検出された石器類が占める。土器は破片が多く磨滅も呈していることから明確に出来ないが，Ａ群土器は縄文早期中葉の大寺式併行土器・Ｂ群土器は縄文前期初頭～早期末併行土器・Ｃ群土器は縄文前期末の大木５式併行土器・Ｄ群土器は中世陶器の仲間に層するものとみられる。

次に石器について説明を加える。

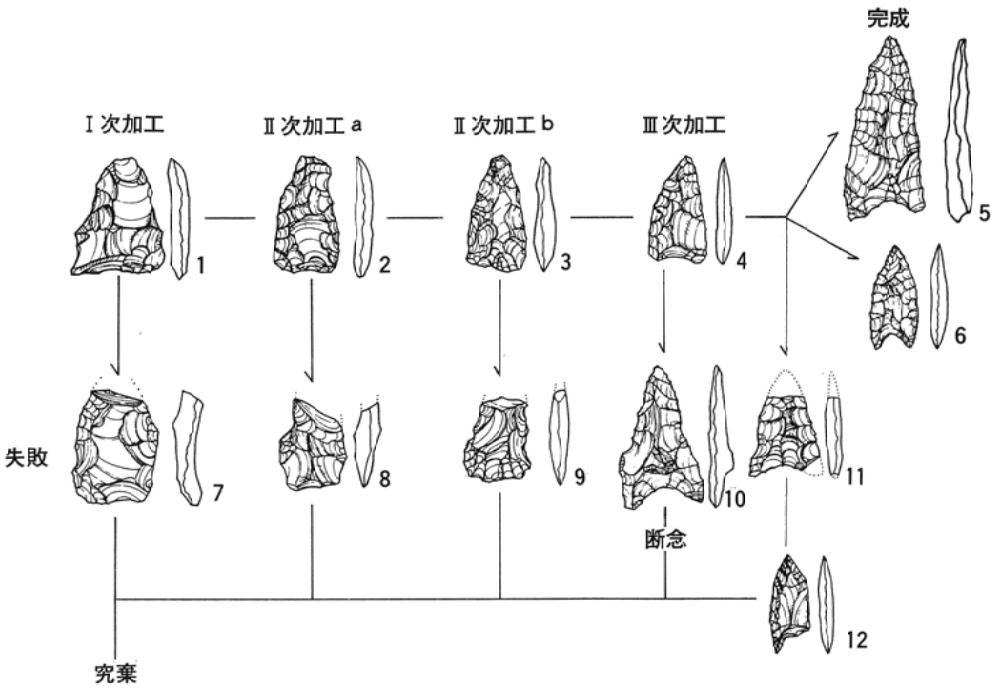
石器はすでに前述している様にＳＴ１・ＳＴ２を中心に8856点がある。分類ではａ～ｋの11類に大別された。等に石鏃に関しては剝離順位より４類に分類できた。これによるとb^1類は最初の外形調製を行うもの。第Ⅰ次加工と呼ぼう。

b^2類は両縁の調製を主とするもので，ａ類からさらに二次加工を施こすもの。第Ⅱ次ａ加工と呼ぼう。

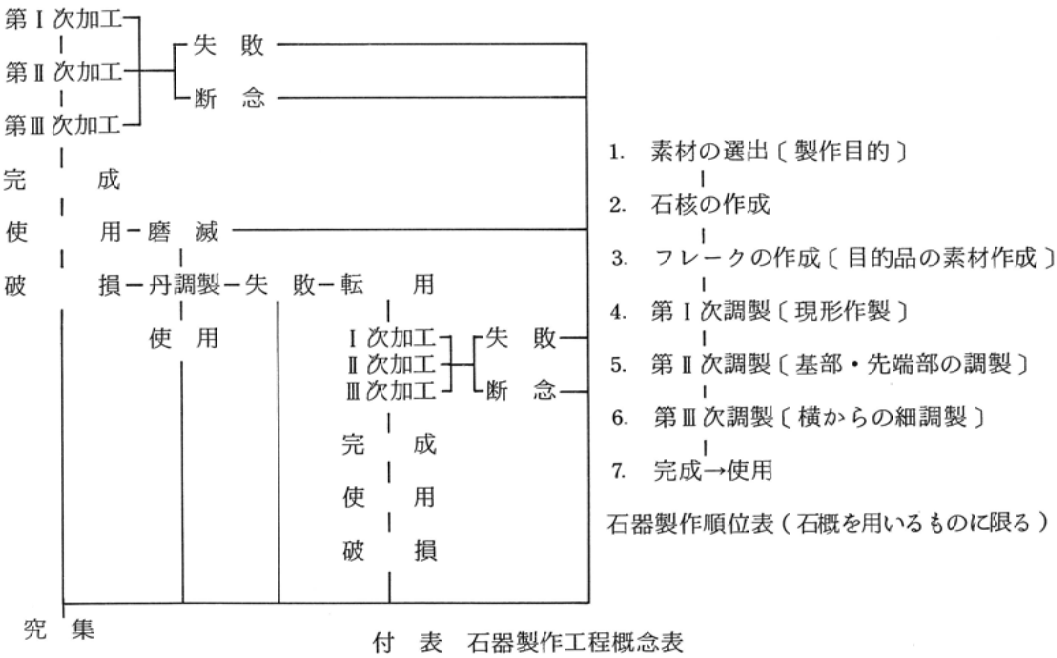
b^3類は基部・先端部・側縁の打面調製を有するもの。第Ⅱ次ｂ加工と呼ぼう。

b^4類は横位から最後の調製を施したもの。第Ⅲ次加工と呼ぼう。

これらのほとんどは究乗された内からのもので，これを理解するには次の表現と順位が指適される。



第15図　石鏃製作順位図



付　表　石器製作工程概念表

参 考 文 献

(1) 西村真次（ 1937 ）「置賜の古代文化」『東置賜郡史上巻』

(2) 五十嵐不二夫氏の永年に亘る採集資料が町公民館に展示されている。同氏の御教示による。

(3) 五十嵐不二夫（ 1952 ）「川西町出土の経筒について」『羽陽文化第62号』

(4) 小松左岸幹線工事の際当地区より須恵器片が筆者等によって発見され，佐野遺跡とした。

(5) 山形県教育委員会（ 1978 ）『山形県埋蔵文化財遺跡地名表』

(6) 青森県の大畑遺跡で磨製石器を製作したものとみられる住居跡が発見され，調査に当った橘善光氏によって石器工房跡と発見されている。

(7) 手塚　孝（ 1976 ）「№24（清水北C）遺跡」『米沢市八幡原中核工業団地告成地内埋蔵文化財調査報告書』第Ⅱ集　米沢市教育委員会

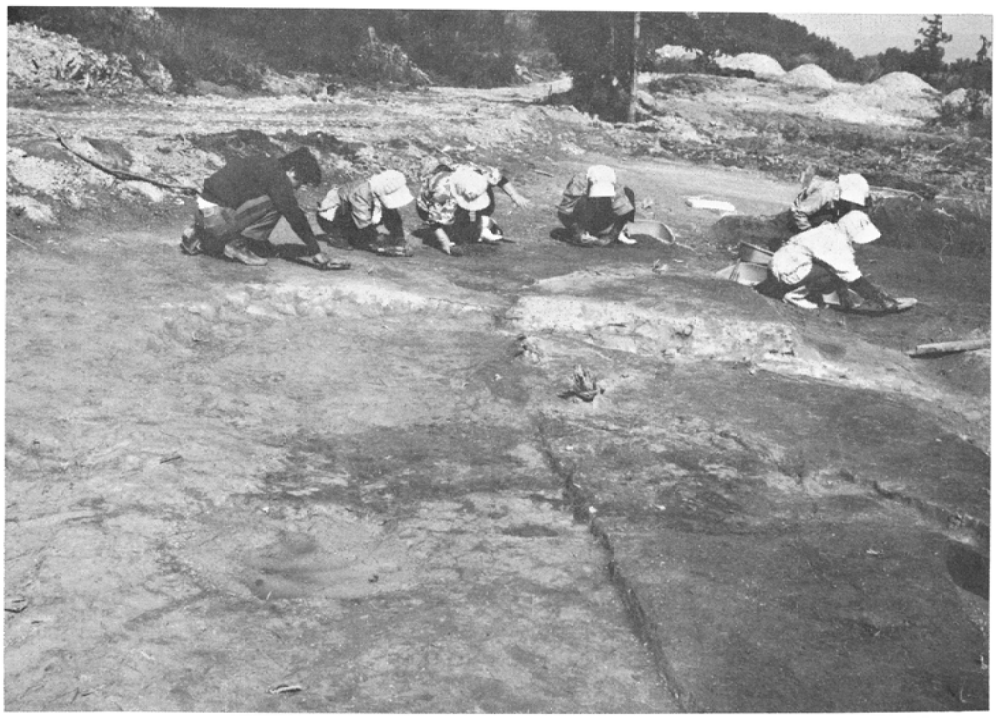
(8) 住居跡周溝の底部よりの検出や石鏃の破損品が多いことからＳＴ１に関連するものとも思われるが，接合資料の把握や石材の吟味等を現在行なっており，明らかになった次点で別の機会に発表したいと考えている。

(9) 手塚　孝他（ 1978 ）「郡之神遺跡」『山形県埋蔵文化財調査報告書第23集』山形県教育委員会

(10) 橋爪　建・亀田昊明・手塚　孝の調査による。「№27遺跡」（ 1977 ）『八幡原残存遺跡発掘調査現地説明会資料』

図　　版

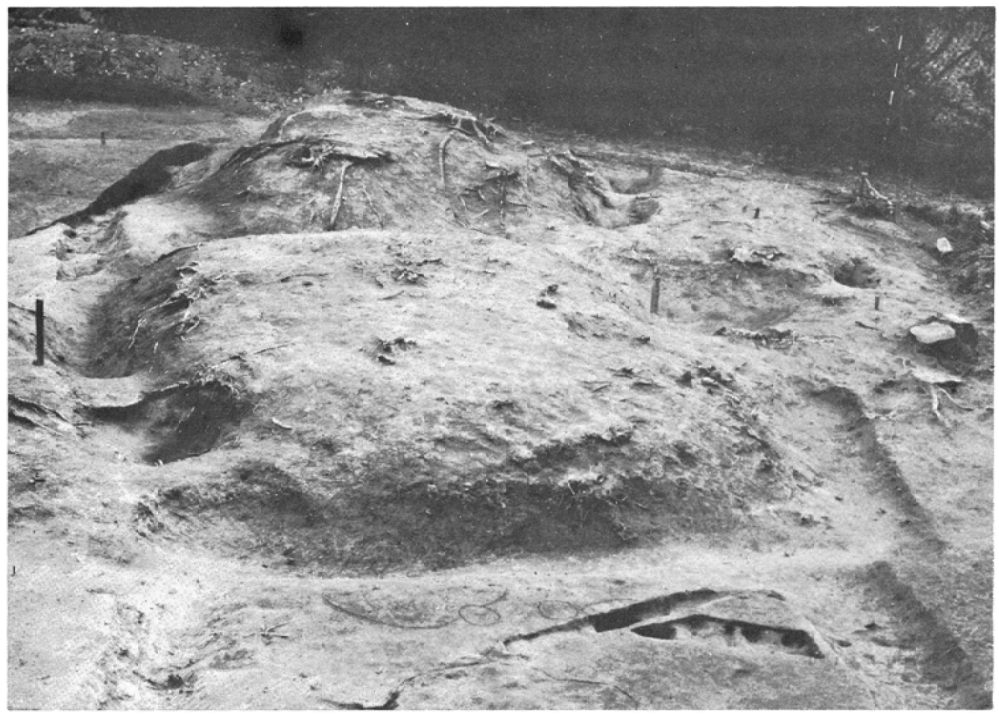
a　遺跡近景



b　発掘風景

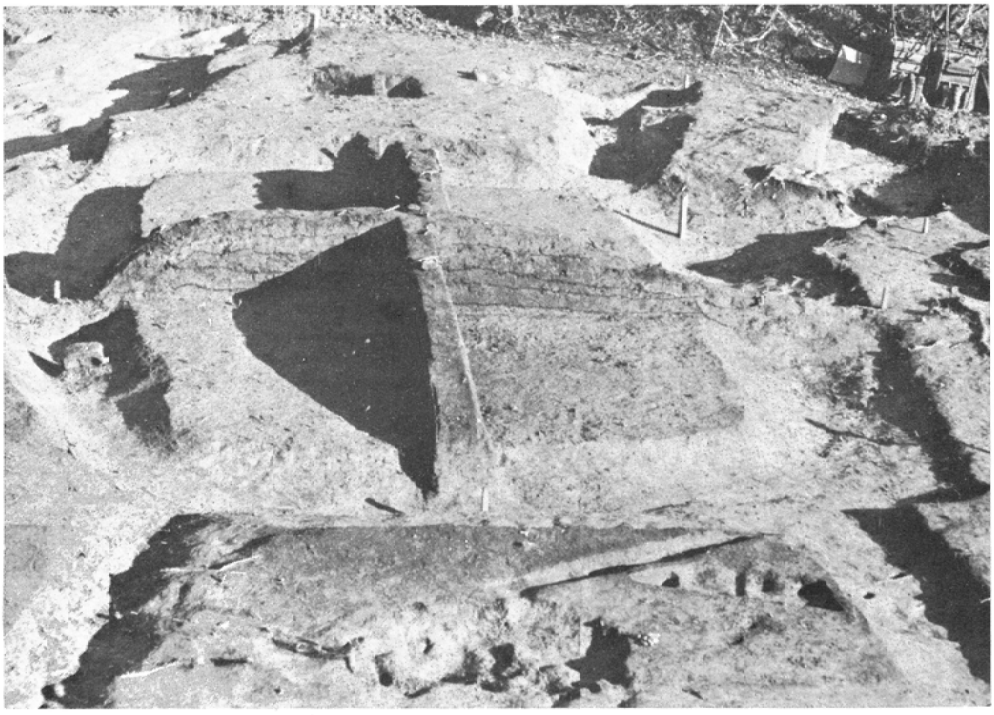
2　図版

a　2号塚全景　ＳＭ２



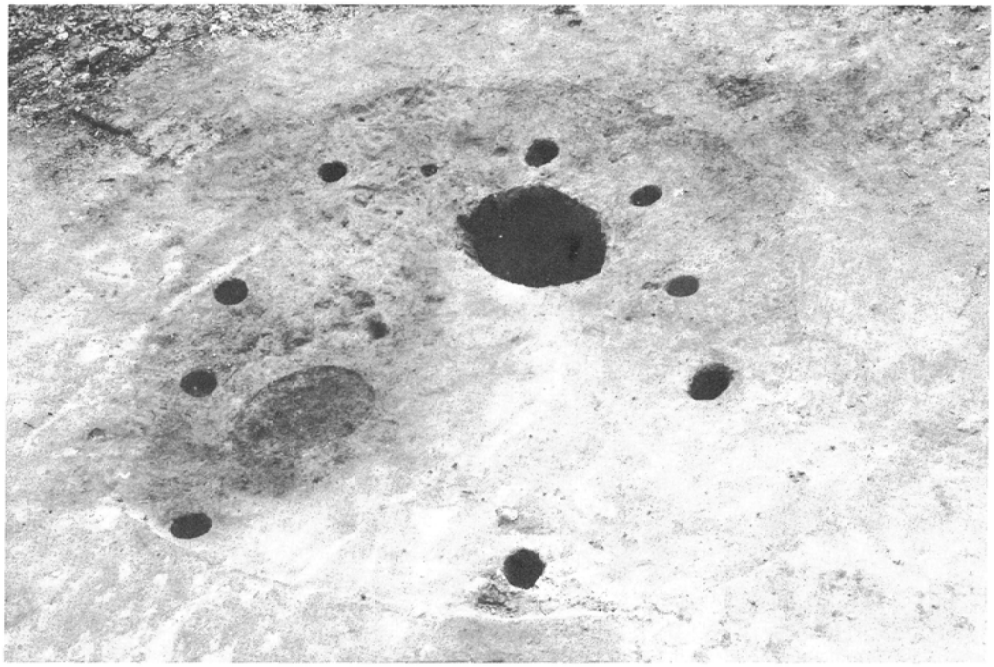
b　3号塚全景　ＳＭ３

a　2号塚完掘状況　ＳＭ２

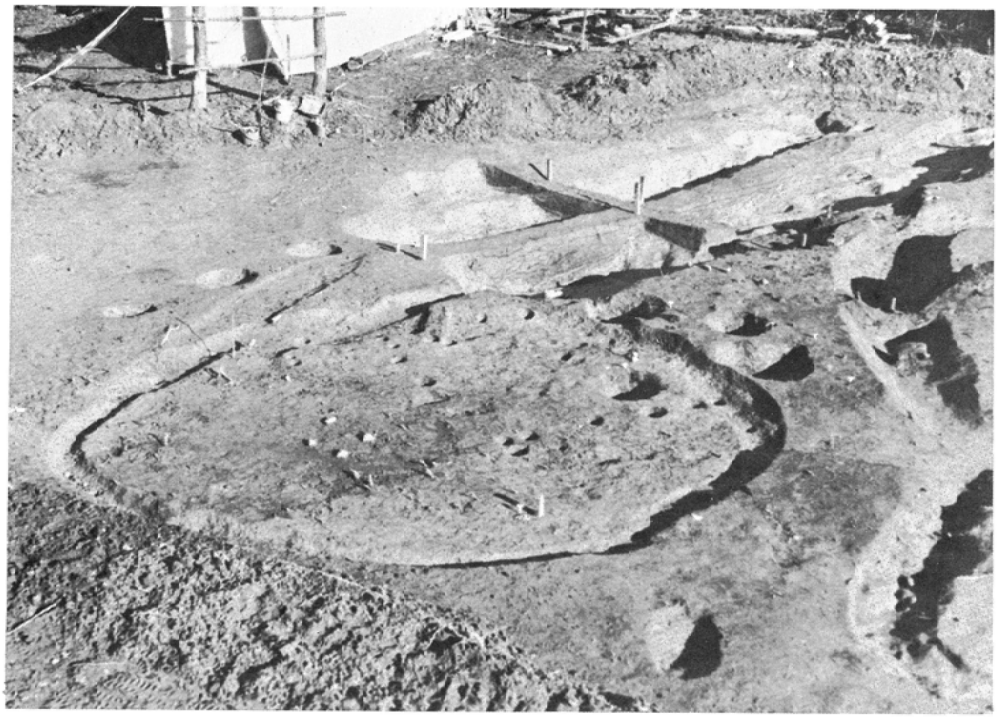


b　3号塚完掘状況　ＳＭ３

4　図版



a　石器工房跡全景　ＳＴ１

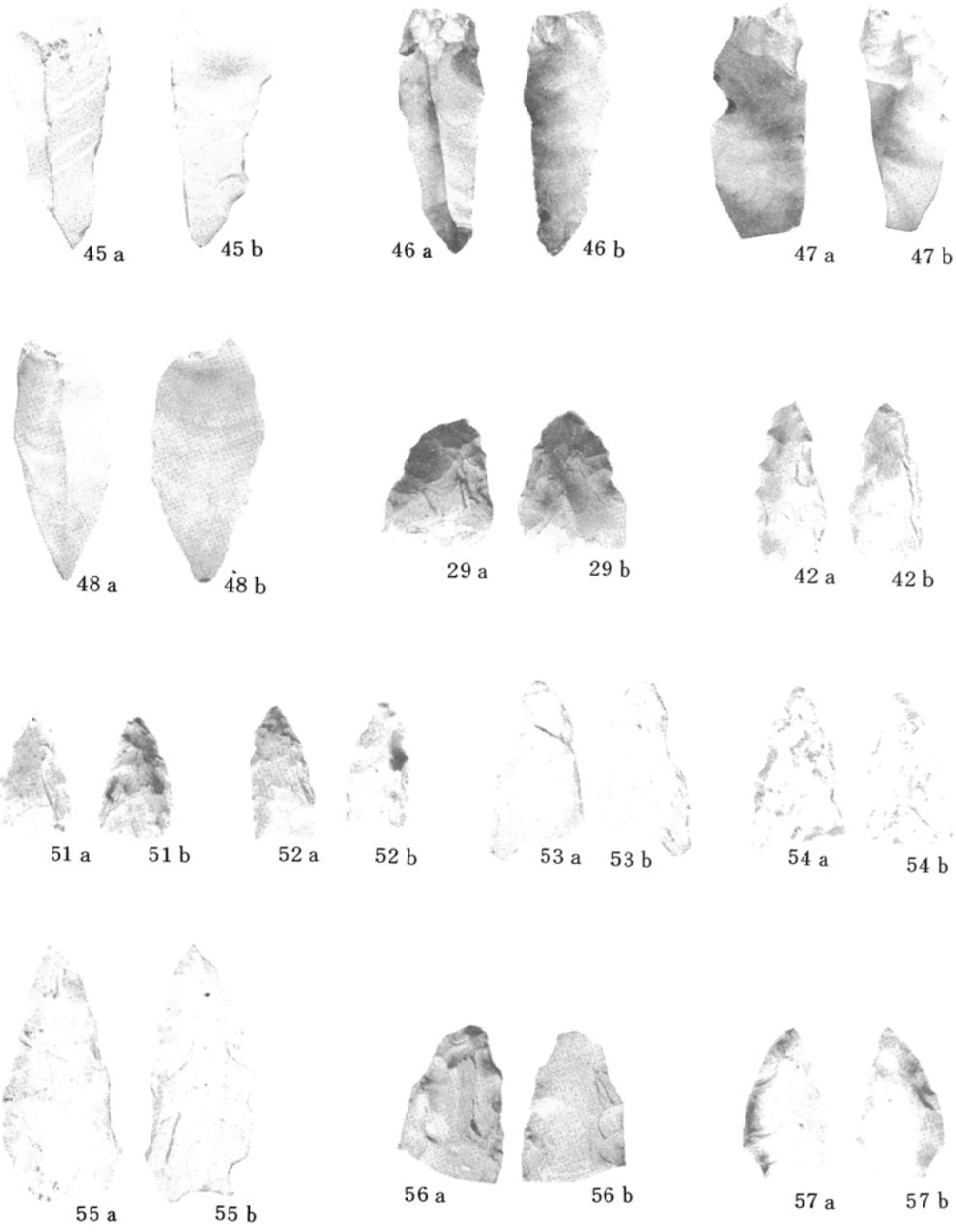


b　住居跡全景　ＳＴ２

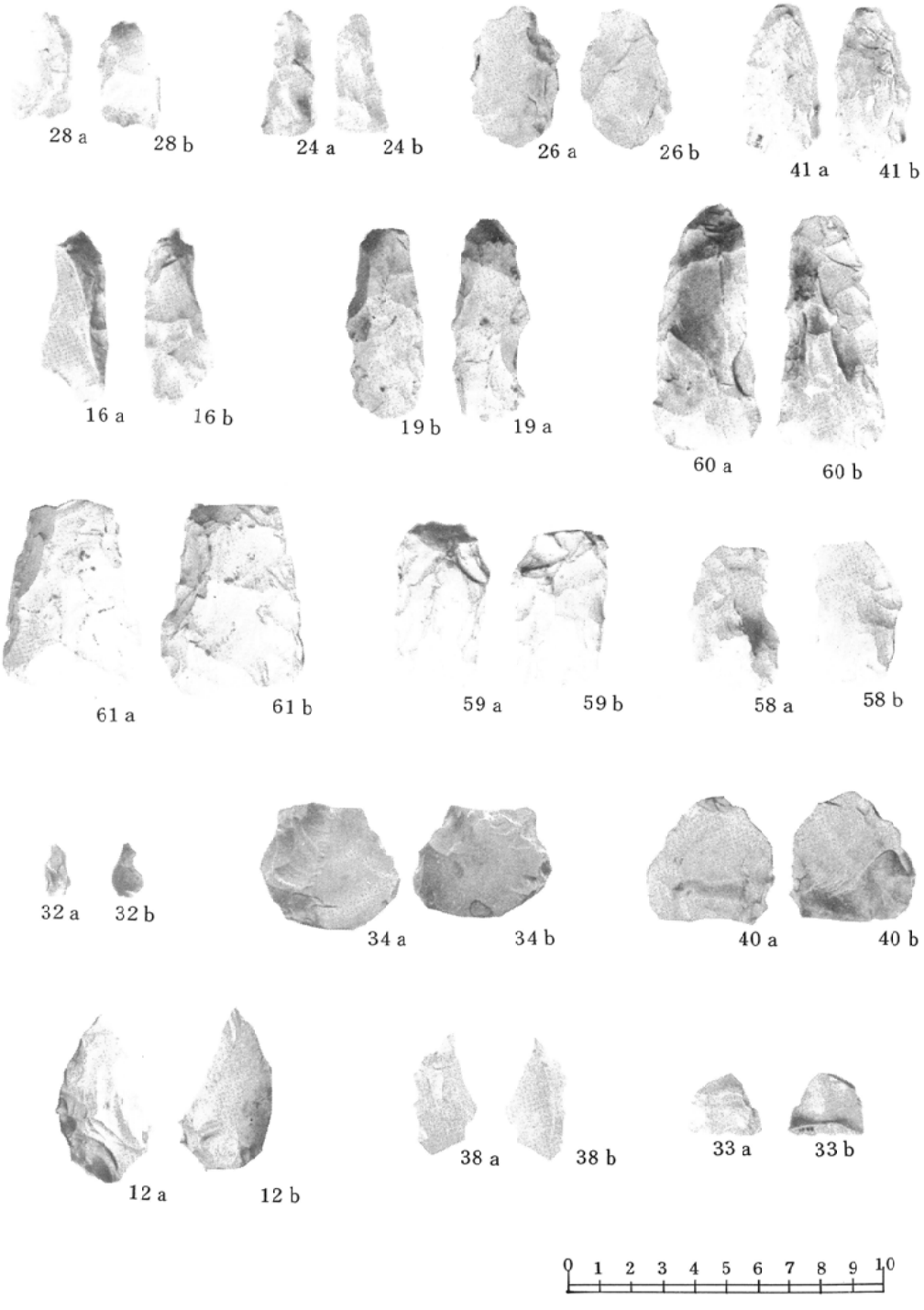
1 a
1 b
8 a
8 b
2 a
2 b
50 a
50 b
49 a
49 b
4 a
4 b
3 a
3 b
5 a
5 b
36 a
36 b
6 a
6 b
9 a
9 b
7 a
7 b
35 a
35 b
22 a
22 b
25 a
25 b
21 a
21 b
30 a
30 b
10 a
10 b
43 a
43 b
39 a
39 b
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

出土石器　(1)

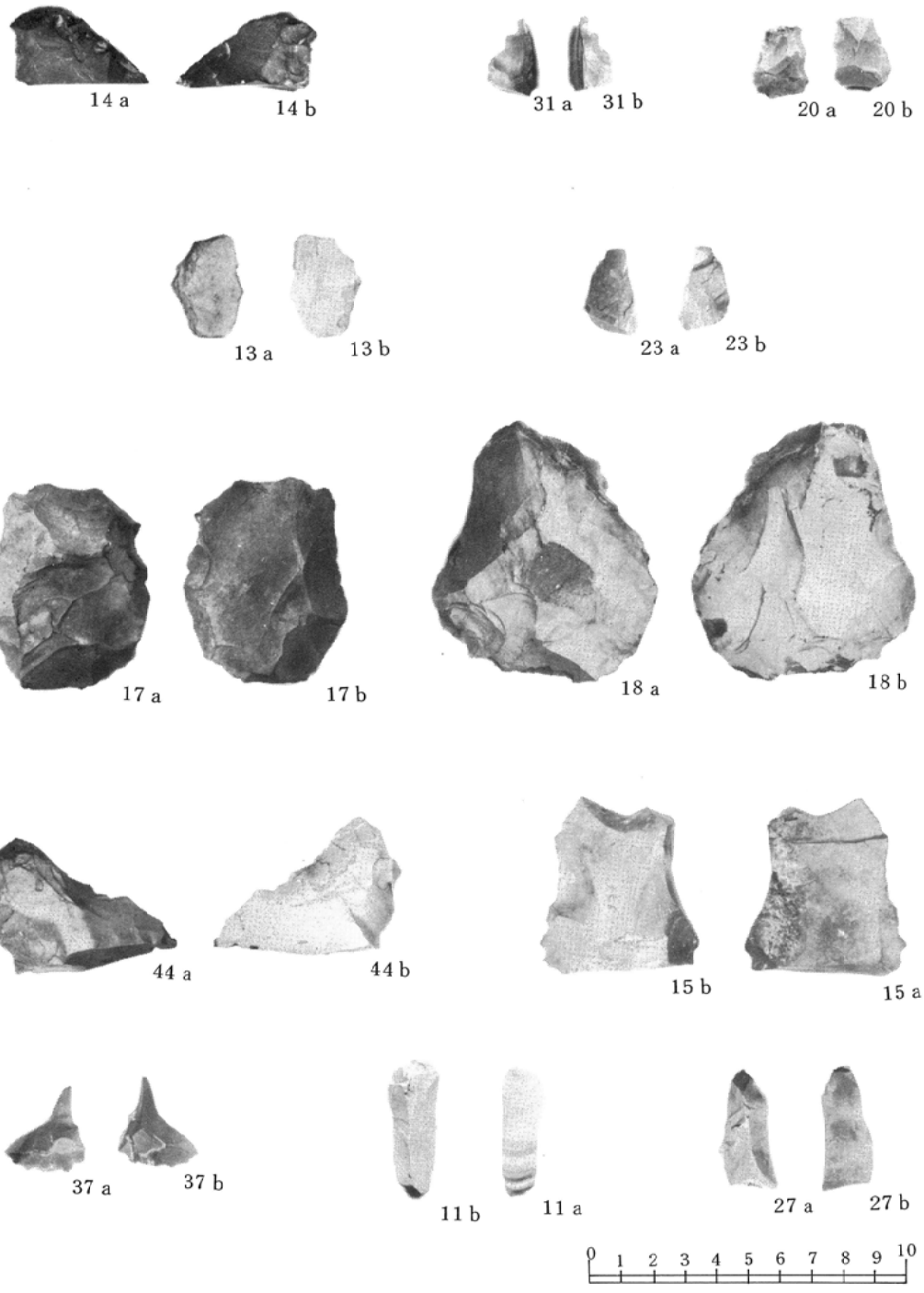
6　図版


45 a
45 b
46 a
46 b
47 a
47 b
48 a
48 b
29 a
29 b
42 a
42 b
51 a
51 b
52 a
52 b
53 a
53 b
54 a
54 b
55 a
55 b
56 a
56 b
57 a
57 b
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

出土石器　(2)

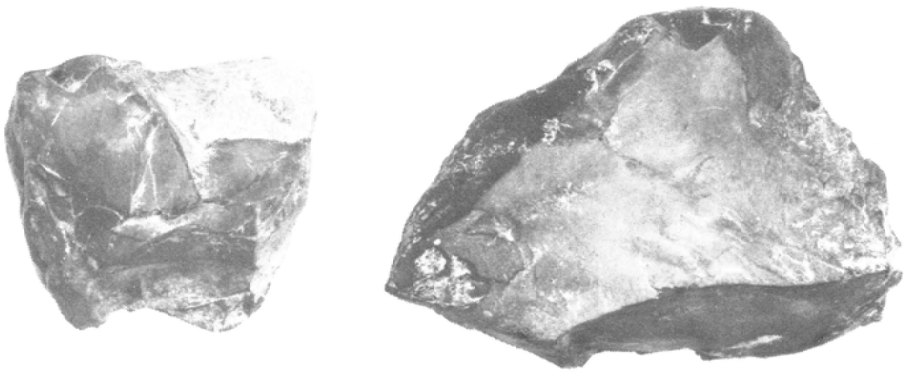

28 a
28 b
24 a
24 b
26 a
26 b
41 a
41 b
16 a
16 b
19 b
19 a
60 a
60 b
61 a
61 b
59 a
59 b
58 a
58 b
32 a
32 b
34 a
34 b
40 a
40 b
12 a
12 b
38 a
38 b
33 a
33 b
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

8　図版


14 a
14 b
31 a
31 b
20 a
20 b
13 a
13 b
23 a
23 b
17 a
17 b
18 a
18 b
44 a
44 b
15 b
15 a
37 a
37 b
11 b
11 a
27 a
27 b
0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

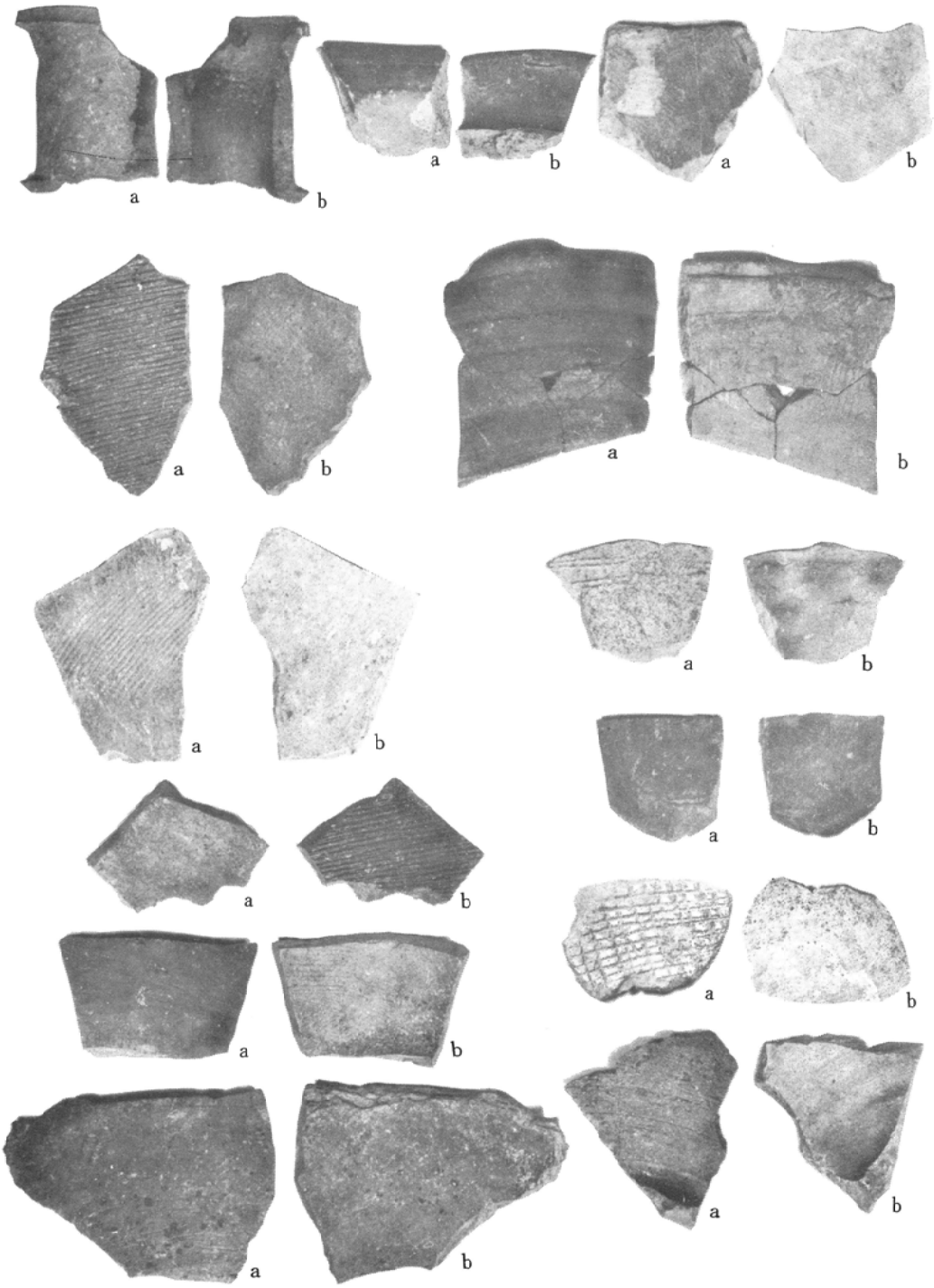
出土石器　(4)

a　ＳＴ２出土土器

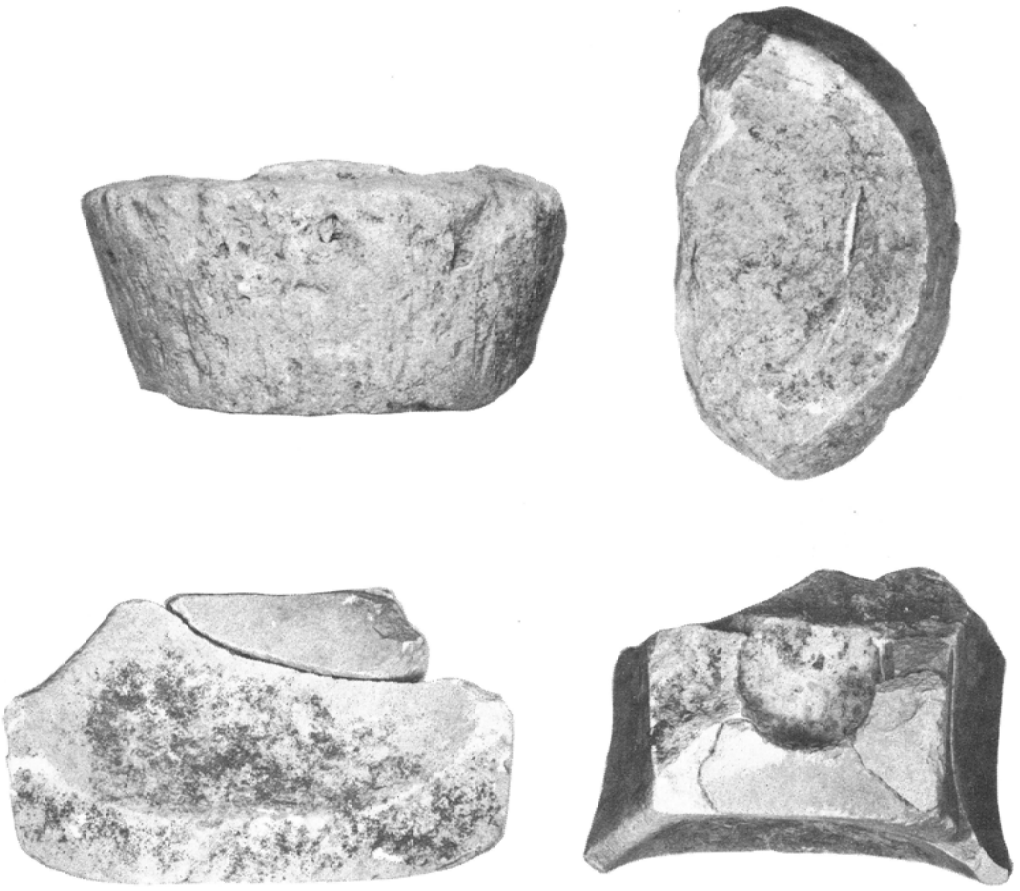


b　石　　核

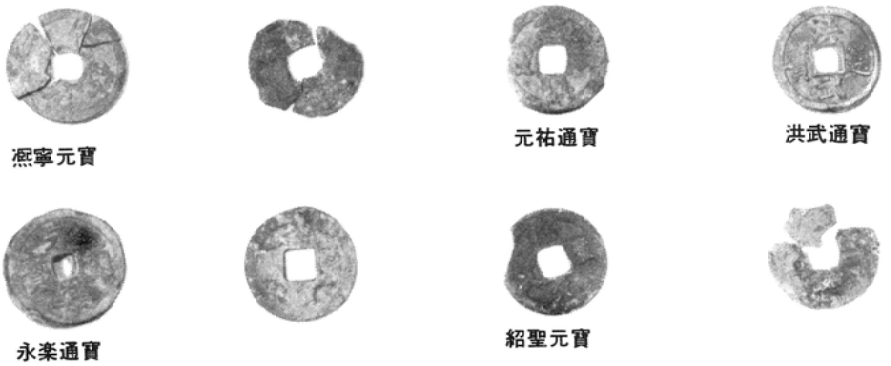
c　チップ　ＲＱ62



出土中世陶器



a　五輪塔



b　古銭（SH6・7）

その他の遺物

緑と愛と丘のある町

千松寺遺跡発掘調査報告書

昭和55年 4 月29日 印刷

昭和55年 4 月30日 発行

発行 川西町教育委員会社会教育課

印刷 よ ね ざ わ 印 刷